
雨が泣くのを誰が知る

小鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨が泣くのを誰が知る

【Nコード】

N0077T

【作者名】

小鶴

【あらすじ】

妹が泣きながら助けを求める夢。いつのまにか来た異世界。理不尽なこと。分からないこと。どうして私が狙われるのだろう。私はどうなるのだろう。知らない世界に来た少女が戸惑いながらちよつとずつ進んでいく話です。

勇者になることも王様に惚れられることもありません。もしも私たちが知らない世界に放り出されたら、楽しいことばかりではないと思います。でも、辛いことばかりでもないといいなと思っています。

1 喜びの雨が泣く

……えちや……ねえちや……。

頭の中に幼い妹の声が聞こえてくる。幼い？ 違う、妹は私と一緒しか変わらない。だというのにどうして妹のことを幼いと思ったのだろう。きつと、その声があまりにも弱弱しくて、今にも泣き出しそうであったからだ。

2

ないで……おねえ、ちや……。

私のことを必死で呼んでいた。どこにいるの？ どうして泣いているの？ 沢山の言葉が思い浮かぶのに、なぜか私はそれを口に出すことができない。まるで声というものが存在しないかのように私の喉

はピクリとも震えなかった。

妹の声がどんどんと大きく、なのにもう聞いていられなくらいに悲しみの色を帯びてくる。

どこ、どこにいるの！？声を出せないのがもどかしくて、目から涙が伝う。頭の芯から響いてくるその声は、私の心を揺さぶる。震わせる。

おねえちゃ……おねがい、お願い……行かないで……。

妹の声がゆっくりと小さくなっていく。遠ざかっていくのが肌で感じられた。

待って、消えないで、なあに、聞いてあげるから、ねえ、どうしたのか言って！私は必死にそう心の中で訴える。私の口は相変らずに活動することを放棄し、まるで筋肉が固まってしまったかのように動かない。

妹の声はもう、呂律が回らないほどに涙で濡れていた。どうして、どうして泣いているの。

おねえちゃ……、えちゃん……お願い、助けて……。

私を助けて!!

ビクリと身体を震わせて、時雨は飛び起きた。その勢いでベッドから布団とともに転がり落ち、頭を床にぶつけ、ゴンとひどい音が鳴った。一瞬呆けた後に、ジンジンと言うよりはズキズキとした痛みが時雨を襲う。

またこの夢だ。

時雨はぶつけた頭を押さえながら、顔についた涙の痕を寝巻の袖で思いきり擦って消した。目が覚めたばかりだというのに、すっかりと冴えてしまっている。それもこれも、すべて今見ていた夢のせいであつた。

一体何度目なのだろうか。毎日のように、時雨はこの夢を見るようになっていた。

最初に見始めたのはもう三カ月は前だろう。初めの頃は一週間に一度ほどのペースで、誰が話しているかも何を言っているかもよく分からなかつた。それがだんだんと、月日がたつにつれて一週間が四日に、四日が二日に、そして毎日と、夢を見る間隔は狭まり、それと同時にその声も話す内容もはつきりと聞き取れるようになっていた。

妹の声だと時雨が気付いたのは一カ月ほど前だ。それまでは不思議な夢を見るものだと言はれていただけの時雨も、声の主がわかり、内容も聞き取れるようになってからその夢の気味の悪さを感じていった。

友人たちに話しても笑い飛ばされてしまい、妹に直接こんな夢の話をするのは憚られた。自分はどこかおかしいのかもしれないとまで時雨は考え、病院に行った方が良いのではないかとまで考え一人で悶々とするようになっていた。

ただ同じ夢を繰り返してみるだけであるのならばまだいい。時雨が何よりも嫌なのは、いつも妹の悲痛な叫び声とともに目が覚めることだつた。

家族の痛々しい声で目覚めてしまえば、窓から差し込む朝陽も到底清々しく思えない。このせいでいつも彼女の寝覚めは最悪であつ

たし、夢を見ることへの嫌悪からか不眠気味にもなりつつあった。

そんなことを時雨が考えていると、時雨の部屋のドアがガチャリと音を立てて開き、妹がドアの隙間からびよこんと顔を覗かせた。綺麗な栗色に染めたばかりのセミロングが妹の動きに合わせて揺れている。長い睫毛がぱちぱちと、驚きと心配の色を浮かべた瞳を形どって動いていた。

「おねえちゃん？大きな音したけど。どうしたの？」

「あ、ううん、ベッドから落ちただけ！気にしないで、喜雨きう」
「なにやってんの、馬鹿だなあ」

じゃあ私先に学校行くからね、と言って、所属する陸上部の朝練がある喜雨は眩しい笑顔を見せて時雨の視界から消えた。いつてらっしゃいという言葉を返す間もなく、時雨は喜雨に向けていた笑顔を解きながら彼女が出て行ったドアを見つめ、小さく溜息を吐いて目を伏せた。

こんなにも元気に目の前にいるというのに、いったいどうしてあんな夢を見るといふのだ。

痛みの引かない頭をさすりながら、時雨はベッドの縁に腰を下ろした。

時雨の一つ下の妹は、時雨にとって自慢の一つだ。顔の造り自体は時雨と喜雨は似ていたが、お互いの性格の違いによって、表情の造り方はまったく異なっていた。

喜雨は明るく天真爛漫で、にこにことした笑顔には人を引き付ける愛嬌がある。学校ではクラスの中心となり、わいわいと騒ぐのが好きな少女だ。

時雨は妹と比べれば落ち着いていると言われる性質だったが、どちらかと言えば妹の人懐っこさがとても顕著なだけであり、どこにもいる普通の女子高生と言えた。だからと言ってそんな自分に時雨がコンプレックスを持つわけでもなかった。時雨と喜雨は仲がいい。時雨は明るく自分にはない部分を持つ喜雨に対して憧れないことがないとはいえなくとも、自分が妹より劣っているというようなことは考えたこともなかった。

時雨の家は両親は共働きで忙しくめつたに家族全員が揃うことはない。少し淋しいことではあったが、高校三年生ともなれば両親に対して駄々をこねるような年齢は過ぎていたし、両親が忙しいからこそ他の姉妹兄弟よりも自分と妹は仲が良く、楽しく暮らしているのだとも時雨は思っていた。

だからこそ、妹があんなにも悲しそうに涙を流す声を毎晩のように聞くことは時雨にとっては大きな苦痛になっていたし、時雨は自分が見ている夢に対して憤りさえ覚え初めていた。

時雨はもう一度ため息を吐いてから、ぐっとお腹に力を入れながら気合も入れて、ほっぺたを軽く叩いた。思いきり伸びをしてベッドから立ち上がる。嫌な夢だけれども、夢は夢。そう割り切ろうと時雨はいつも思っていた。

そして気分を切り替えなくてはと思いながら時雨が時計に目をやると、時計の針はいつも家をでる時間の十分前を指していた。ぎゃあ、と思わず間拔けな悲鳴を上げながら、時雨は慌しく動き始めた。

2 梅雨入りの逃走

「ただいまあ」

部活に入っていない時雨は、四時過ぎには学校から家に帰って行くことができる。誰もいないと分かっている、家に帰ってきたら一言言ってしまうのは日本人らしい癖と言えるかも知れないなあ、とどうでもいいことをぼんやりと考えながら、時雨は靴を脱いで家の中に入り、制服から部屋着に着替えると台所に向かった。

忙しい両親の代わりに、家事は姉妹で当番を決めてやることになっていた。今日の夕食は時雨が作る番であり、少し早いけれども作ってしまったおうち時雨が冷蔵庫を開けたそのとき、彼女の携帯がポケットの中で震えた。有名な映画音楽の着信音はメールの来着を知らせるもので、時雨は冷蔵庫の中身を物色しながら差出人の名前を見る。喜雨からのメールだった。

パカリと間抜けな音で携帯を開いて時雨はメールを確認した。夕食は要らない旨が書いてあるものであったそのメールは、”友達と食べることになったから、ごめんね”そんな台詞とともにひどく申し訳なさそうにした絵文字までついていた。了解です、と返信をしながら時雨は冷蔵庫を閉める。

喜雨がいないのであれば、時雨はとくに夕飯の準備をする必要性を感じなかった。時雨はもともと料理が得意だったり好きだったりするわけではない。一人であるならばインスタント食品で済ましてしまうほうが効率がいいと考えて、時雨は暇になった時間をどう過ごすかを思索した。喜雨がいたならば家においても楽しく過ごすこと

ができるものの、その妹は部活をこなしてその後夕食を食べに行くのであるから、まだまだ帰ってこないのである。

しばらく思案した後、時雨はよし、と意味もなく気合を入れると、時雨は部屋着から外に行けるような適当な服に着替えた。そして肩掛け鞆に財布と携帯をいれ、スニーカーを履いて外にでる。雨の降りそうな雰囲気を見て、鞆の中に折りたたみ傘をプラスする。

暇な時間をつぶすために、本屋に出掛けることにしたのだった。

暑さが増し始めたこの季節に、湿った空気はむしむしとしたまわりを感じさせるが、隣家の庭に咲いた綺麗なアジサイの花が時雨の気分を楽しくさせた。鼻歌を歌いながら、時雨は本屋までの道を歩き始めた。

「うわ、すごい雨」

時雨が一時間ほど本屋の店内をぶらついて、二冊の本を買い終わって店を出るときには外はひどい土砂降りになっていた。

傘を持っていてよかったと、時雨は鞆から取り出した傘を大きく

開く。そして、買ったばかりの本を濡れないように鞆の奥にしまつと、水溜りを避けながらゆっくりと歩き始めた。

それにしても本当にひどい雨である。ザーザーという音で、他の音はうるんとして聞き取り辛くさえあった。時雨の開いた折り畳み傘の骨は雨でしなり、必死で雨から時雨を守るうとしていているようでもあった。けれどもそんな傘の下を通り抜けて、時雨の身体にも雨粒は飛んでくる。

雨季に入ったせいで雨が多いのだ。このまえ降ったのはいつだっただろうと頭の中で日にちを遡って、時雨は一昨日にも雨が降ったことを思い出した。そのときはこんなにも激しくなかったなとも考える。

道行く先の道路上には、大きな水溜りがあちこちに姿を現していた。

嫌だなあ。

時雨は水溜りを見て反射的にそんなことを考えた。

時雨は雨自体が嫌いなわけではないが、靴にしみこんで靴下まで濡れたときの感触は大嫌いだった。間違つて水溜りにでも足を突っ込めば、たちまちそうなってしまう。

そんなことを考えながら水たまりを避けるために下を向き気味に歩いていたせいか、しばらく歩いた後に、時雨は前から来た人にくいつと傘を当ててしまった。

「わ、すいません！」

水溜りを気にしすぎて、まっすぐに歩いてくる人影に気付かなかったのだ。驚きとともに反射的に時雨は謝った。

相手の服が濡れてしまったかもしれない。そんなことを考え、自

分よりも背が高く傘で隠れてしまつて見えない相手を見ようと、時雨は自分の傘を後ろに少しずらす。

けれども、時雨が相手の顔を見ることは叶わなかった。時雨が相手の顔を見る前に、その相手は時雨の腕をむんずと掴み、そしてそのまま時雨を引っ張るように走り始めたからだ。

あまりに突然のことに、身体に力など入れていなかった時雨はそのままぐいぐいと引っ張られてしまう。掴まれている腕の手に握っていた傘は、風の抵抗にさらされて思わず離してしまつて、お気に入りの傘が風に舞つて飛んで行くのが時雨の目の端に映つた。

「ちょっと、離してよ!」

我に帰つて時雨が声をあげても、目の前の人間は離す素振りも見せなかった。

そこで時雨は、足に力を込めてその場に踏ん張り、勢いを付けて走っているほうと反対に自分を引っ張つた。いきなりの抵抗に、時雨の腕を掴んでいた人間は前のめりになつていた重力に逆らえず、時雨の手を離れた。反動で二人とも尻餅をつく。べちゃりと湿つた感触が時雨の肌に伝わつた。

そしてその時やつと、相手の顔を時雨は見る事ができた。最初に時雨の目に飛び込んできたのは、色素の薄い、茶色の瞳。そして長い髪の毛と膨らんだ胸だった。背の高さと時雨を引っ張る力の強さで、男だとしか思つていなかったその人は、女であった。

綺麗な人だ。

時雨は思わずその容姿に見蕩れていた。鼻筋が通り、眼筋はきりりとしている。なのに不思議ときつい印象を持たない、そんな女だったのである。

けれども時雨がそう思ったのは束の間だけで、逃げるなら今のうちだと瞬時に立ち上がり明るい繁華街のほうへと走り出した。二十メートルほど走ったときに後ろを振り向くと、時雨を引っ張っていた彼女との距離はまだ十メートルは開いていた。明るい通りに入るまであと二十メートルほどで、時雨はがむしやりに足を動かした。

後ろで何かを叫んでいる声が時雨の耳に届いたが、雨の音で内容はかき消されてしまっていた。ただその叫び声は怒りを含んでいることだけは時雨にも感じられて、恐怖をばねに懸命に時雨は走った。水溜りに足が思いきり突っ込んでいることなどは気にならなかった。

繁華街の中に行きさえすれば、捕まりそうにさえなっても大声で助けを呼べばいい。そう思って、時雨は最後のスパートをかけようと、足に力を入れた。

けれどもその瞬間、右の道から出てきた大きな胸板に勢いよくぶつかってしまった。鈍い音がしたが、ぶつかった人間はよろけることもなく、逆によるけた時雨を支えてくれた。

人だ、よかった！

そう思って時雨は助けを求めようとその人の腕を握った。

「助けてください、変な人が追いかけてくるんです！」

そう言った時雨の肩を、ぶつかった男性はゆっくりと撫でた。時雨が戸惑って、あの、と呟いた瞬間、肩を撫でていた手が時雨の腰に当たると、ぐっと力が込められた。

ああ、しまった。

時雨がそう思ったときにはもう遅かった。時雨はそのまま持ち上げられ、男の肩に乗せられていた。この人もあの女の人の仲間。時雨がそう気づいて、逃げなくてはと時雨が身体をよじつても、男の背中を叩いても、その男はびくともしなかった。

叫べば繁華街に届く距離だろうか、そう思っても、全力で走ったばかりの時雨は息苦しさを声など出せるものではなかった。

「何逃げられてんだ」

「ごめん、抵抗されると思わなかったから油断してた」

時雨の抵抗も空しく、男女は軽く話をしながら歩き出そうとしていた。さっさと戻ろう、そんな会話が時雨の耳に入って、時雨は恐怖で涙が出てきていた。

どこに連れて行かれるの、何されるの？やめて、いやだ、助けて、誰か…。たくさんの言葉が時雨の頭の中を一度に駆け巡る。

どうにかして逃げなくては、そう思っても時雨の身体はしっかりと男の腕の中に固定されていた。時雨を抱えたまま、二人はランニ

ングほどのペースでどこかに向かっているようだった。

いつの間にか雨で時雨の体中がベトベトになっていて、髪の毛は顔にべったりと張り付いていた。ひゅうひゅうと、時雨が呼吸をするたびに肺が苦しそうに音を立てる。

このまま寝てしまったほうが楽かも知れない。恐怖から逃げたいあまり、時雨の意識は遠のいて行った。頭の中が白くなっていくのが時雨自身に分かった。何も考えられなくなっていく。体にあたる雨が子守唄のように思えてきて、気持ちがいい。

時雨は全体重を、自分を抱えている男に預けた。

眠りに落ち始めた時雨の頭の中に、どこかから声が聞こえてくる。

……ねえ……行かないで、おねえちゃ……。

ああ、またこの夢。時雨は諦め半分でその声に答える。

違うの、喜雨、行きたいわけじゃないの、連れて行かれちゃうの。

おねえちゃ……おねがい、お願い……行かないで……。

だから、私だって行きたくないんだって。そんなこといわれたって、この人たちが私を連れて行っちゃうの。

おねえちゃ……えちゃん……駄目、殺されちゃう……。

いつもと違う。時雨は初めてその違和感に気付いた。
駄目？殺されちゃう？どっという意味なの、ねえ、喜雨、教えて！

喜雨の声はすでにフェードアウトを始めていた。

ああ、消えてしまう。消えないで、喜雨、どういことなのか教えてったら！

時雨の声はもう喜雨に届かないようだった。かすかに喜雨の声が聞こえるだけだ。

ああ、もう夢が終わってしまっ、あとは喜雨の最後の声で終わり。諦めて、時雨がそう思った瞬間だった。

いやっやあああああああ！

一瞬意識がとんだ時雨の頭の中に、劈くような大きな声が響いた。あまりの音に驚いて時雨は渾身の力を込めてガバリと身体を起こす。行き成りの行動で、添えるほどまでに緩めていた男の腕から時雨は転がり落ちた。地面に強く身体をぶつけたはずだが、その痛みを時雨は不思議と感ぜられなかった。

今のは、喜雨の叫び声？

時雨の頭の中に叫び声が未だに響いてガンガンと木霊していた。けれど、身体はすることを分かっていた。地面を蹴って走り出す。逃げて、喜雨を助けに行かなくては。尋常ではないほどの喜雨の叫び声で、時雨の中に浮かんできたのは妹を無くすのではないかという恐怖だけだった。喜雨を助けなくては、思うのはそれだけ。

いつの間にか辺りは真っ暗になっていた。今度こそ明るいところへ行こうと、時雨は知らない道を全速力で走り出す。どこでも良いから、人がたくさんいる場所に行かなくてはとその気持ちだけで時

雨は走り続けた。

そしてどれくらい走ったか分からなかったが、やっと一筋の光を見つけた頃には時雨はふらふらだった。めちやくちやに走り回って、時雨の進行方向に、眩しい明りが現れたのだ。あそこなら人がいるはずだと、あそこまでどうにか行かなくてはと、そう考えて時雨は懸命に足を動かす。

時雨の耳に、後ろから二人の声が聞こえていた。このチャンスのがしたら、確実に逃げられないということは時雨にも分かっていた。逃げられたら足が使えなくなっただっていい、そんな思いで時雨は道を駆けていく。あと少しなのだ。

十メートル、五メートル、三メートル……。

光りまでの距離はどんどん縮まっていく。

その光だけを一目散に目指していた時雨は、そこだけが異様に明るいことも、その光が明るすぎて向こう側が何も見えないことも考える余地はなかった。

にい、いち、入った！

心の中の掛け声とともに光の中に全身を入れた瞬間、ぐにやりと時雨の目の前が歪んだ。

え、なに？

時雨がそう考えることができたもつかの間で、次の瞬間に時雨は
その場で気を失ってしまった。

3 雨間に眠る

チチチ、チチチ、チチチ。

鳥の鳴き声で、時雨は目を覚ました。二三度ゆっくりと瞬きをし
ながら身体を起こそうとして、そして時雨は自分の体がひどい倦怠
感に襲われていることに気がついた。体がだるいのである。

ずっしりと、いつもの倍以上の重みがありそうな体をこれまたい
つもの倍以上の時間をかけて起き上がらせた。

今何時だろうと、時雨は寝ぼけ眼を擦りながら目覚まし時計に手
を伸ばす。そして、手は空を切った。

あれ？

そこにはあるはずの時計がない。それどころか、時雨はごわごわ
とした、麻のようなものでできたベッドで自分が寝ていたことに気
がついた。時雨の部屋、ではない。

恐る恐る部屋の中を見回してみると、それは時雨自身の周知して
いる場所とは何もかもが異なっていた。時雨の部屋は木造の、日本
家屋の名残を残した造りになっていたのに対し、この部屋は木造と

はいえどもまるでカントリーな雰囲気なのである。白い壁に木のドア、窓も木でできた開き戸であり、閉まっている今は外の様子は分からなかった。外からはがやがやと人間が要る証拠の騒音が聞こえてきている。

部屋のなかの様子と言えば、真中に木でできた丸テーブルに二対の椅子、壁には戸棚がたてつけられ、それから時雨が座っているベツドがあるくらいである。ベツドの枕元には、時雨の肩掛けカバンが置かれていた。

時雨にとって見覚えがあるのは自分の鞆くらいである。

「……ど……？」

心の中でそう呟いたと同時に、木でできたドアがゆっくりと開いた。驚いた時雨がそちらに目をやると、鮮やかなオレンジ色のワンピースを着た女性がそこに立っていた。ワンピースにはまるで象形文字のような、時雨には理解のできない模様が描かれており、民族衣装のようだった。手には水差しを持っている。

ドアを開けた女性は、ベツドに座ってぼかんとしている時雨を見てあら、と言って嬉しそうににっこりと笑った。

「目が覚めたのね。丸二日も寝ていたのよ、気分はどう？」

澁刺とした声で彼女は時雨に話しかけた。

肩ほどもまでのクルクルとした髪が、元気さの中に女性らしい美しさを併せ持たせている。

外国の人。最初に時雨が思ったのはそれだった。日本生まれなのかな、日本語が達者だなあ。いきなりの展開についていけず、時雨はそんな場違いなことを考えた。

そしてはた、と女性の言葉を思い出す。

二日も寝ていた？

あの、と声を出して、時雨は自分の声がまるで年をとった老人のようにしわがれていることに気がついて、驚きで声帯をを震わすことを止めた。自分の声に何が起こったのかと驚いて喉元を手で触るが、それで何が分かるというわけでもない。

するとドアのところ立っていた女性がふふ、と笑った。

「二日も飲まず食わずですもの、声が枯れていて当然よ。さあ水を飲んで」

差し出された水差しとコップを受け取り、一口飲むと時雨は自分の喉が渴いていることに初めて気がついた。そのままコップに入れた水を飲みほし、さらに水差しからもう一杯コップに移し、また飲み干す。干からびていたワカメを水で戻したようだと、時雨は自分の喉をそう思った。

「ありがとうございます」

女性にお礼を言った時雨の声はかすれてはいたが、もう老人と言
うほどのものではなくなっていた。それを確かめてから時雨は恐る
恐る、自分の疑問を口に出した。

「あの、ここはどこですか？」

「ここはラステュの町よ。貴方が町の外れで倒れていたのを、弟が
連れて帰ってきたの」

「らすてゆ…？倒れて…？」

「旅の途中で疲れて倒れたのでしょうか？」

「旅…？」

「あ、そうだね。食べ物を持ってくるわね。お腹空いているでしょ
う？」

話せば話すほど、時雨の中に疑問は募るばかりだった。女性ほど
うやらせつかちなところがあるらしく、時雨にほとんど口を挟ませ
ないまま話を終わらせると、にこりと綺麗な笑顔をひとつ残して部
屋を出ていってしまった。

ラステュ、旅、倒れていた。三つの単語を横一列に頭の中に並べ
て、そのうちの一つについて時雨は思い当たった。

私は倒れたのだ。

明りの灯った場所を見つけて、私は其処へ駆けこんで、そして気を失ったのだ。時雨は目が覚めてからだいぶ経ってやっと、そのことを思い出した。同時に気を失った瞬間のことにも思い至る。目の前がぐにやりとひんまがったようなあの感覚は、到底忘れられるものではなかった。時雨は初めて気を失うということを経験したが、あれほどに不思議な感覚だとは、体験してみなければわからないものだ。と改めて感じていた。

やっと時雨の頭の中に、倒れるまでの記憶が蘇ってきていた。二人組に追いかけて、捕まって、逃げて。時雨は少しずつ鮮明に思い出していった。土砂降りの雨。背の高い女。時雨を肩に担いだ男。

そうだ、警察に連絡しなくちゃならない。携帯電話が鞆の中にあるはずだと腰を浮かす。

ちょうどその時、女性がお粥のようなものを持って戻ってきた。卵が入って黄みがかかり、温かそうな湯気がひどく食欲をそそるものだ。それを見て、食べることを忘れていた時雨のお腹が騒ぎ出した。遠慮ということをおぼろげに忘れて、時雨は差し出されるがままに木製のスプーンに手を伸ばした。

「いただきます」

下で家事をしているから、なにかあったら呼んで頂戴ね。その言葉を聞きながら時雨は一口含んだ。ゆっくりと咀嚼して飲みこむと、

温かい味が時雨のお腹に染み渡った。

そしてお腹の中にもものを入れると同時に、ゆっくりと時雨にも冷静な心持ちが戻り始めていた。

これを食べ終わったら、直ぐに家に帰ろう。それから警察に行つて。

そうだ、喜雨に連絡をしなくては。自分は二日も家を空けている。心配しているに違いない。

食べることなんかよりもそつちがさきであると思い、それを考え付くと時雨は食べていたお粥の皿をテーブルの上に置いて、寝ていたベッドの上に置かれていた鞆から携帯電話を取り出した。短縮ボタンで妹の番号を呼び出して、そしてそこで気がついた。

「あれ」

圏外。

窓の外からは人の声が聞こえているから、結構な街中だとは思っていたのに。時雨はそう思って軽く携帯を振ってみる。けれどもやはりその表示が変わるわけもなく、不思議に思って窓に手を伸ばした。

きいいい、小さな軋みの音がしてゆっくりと窓が外側に開く。

外の空気を吸って、あたりを眺めて、そのまま時雨は固まった。目に飛び込んできたのは、白色の壁。どの家もどの家も、まるでヨーロッパのどこかの町のように、白い壁にレンガ造りの舗道がずっと続いていた。そして、その向こうに、透き通った透明のような海。木でできた小舟が何艘か浮かんでいる。

時雨は自分の顔から血の気が引くのが分かった。

麻でできたベッドとか、民族衣装のような服とか、ラステユという地名とか、おかしいな、とは思ったけれど。

「...」と「ど」.....？」

時雨はこの時初めて、自分が何も分からないところにいるのだと気がついた。

4 霧雨が走る

がやがやと騒がしい町並みを、時雨は顔を伏せるようにして歩いていた。普通の格好をしているはずなのに、ここにいると浮いてしまっているのである。

町の人々は皆麻でできたような服を着て、靴もサンダルと布を組み合わせたようなものを履いている。ジーパンにスニーカーを履いている時雨はひどく目立っているようで、先ほどから不躰な視線の攻撃にあっていた。

いったいここがどこなのかを自分の目で確かめたくなくて、時雨は思わず寝かせてもらっていたあの家を飛び出してきたのだった。周りの視線で自分が異物であることを自覚しながら、時雨は早足で、知らない街を歩いた。

そこは賑やかな港町だった。

青い空と透き通った海の間で、大勢の人が声を張り上げながら商売をしている。魚、野菜、雑貨、衣服、それぞれの店がそれぞれの役割を担って、小さいながらも楽しそうに切り盛りをしている、そんな活気づいた雰囲気のある町だ。

そんな中で一人浮いている自分が時雨は恥ずかしく、早足でその市場通りを抜けると、もう直ぐそこには海があった。

海岸のほうにはあまり人もいないようで、時雨は人目を避けるために海に向かって早足で歩いて行った。大きな船着き場があるにしては船の数も少なく大きさも小さいので、もしかしたら多くの船が漁に出ているのかも知れなかった。

砂浜の色は白に限りなく近かった。海の色は透明に近いブルーで、その水の驚くほどの純粹さを主張していた。緩やかな波が押し寄せては戻りを繰り返し、薄桃色の貝殻のかけらがいたずらに転がされている。そんな美しい海だった。

波の掛からないぎりぎりの境界まで歩いていつて時雨は立ち止まる。少し離れたところで、数人の子どもたちが砂の城を作って遊んでいた。それを横目で見て、時雨は目を伏せる。

どこをどう見ても、時雨には知らない景色だった。

二日間寝ている間にやはりどこかに拉致されたのかもしれない。先ほどの女性も実はその仲間だったのかもしれない。時雨は混乱する頭の中でそんなことを考えたりもした。

店の看板に書いてある広告も時雨には読めなかったし、使っている紙幣も日本とは全く異なっていた。外国の国、なのかもしれない。時雨はそこまで考えて溜息をついた。

私は売られてしまったのだろうか、今時そんなことが日本であるのだろうか、そんなことを取り留めもなくつらつらと頭に浮かべて気分を沈ませながら、時雨は澄んだ海の水をそっと触ってみた。当たり前前にそれは冷たい。その感触は知っているもので、時雨は少し

だけ安堵した。

時雨が暫くそのまま海の水をぼおつと見つめているといきなり、耳に不可解な音楽が流れ込んできた。

まるでオーケストラを三味線で演奏したような、不思議な音楽である。その音楽の奇妙さにどこかこそばゆさを覚えながら、どこから聞こえてくるのかと時雨は辺りを見回すが、そのような演奏をしている人物は見当たらず、またスピーカーのようなものが設置されているのも見つけられなかった。

「あ、儀式の音楽！」

時雨が耳を傾けていた音に反応して、砂浜で遊んでいた子どもが一人が声をあげた。本当だ、本当だ！儀式の音楽！子どもたちは口々に語りあう。そして、作りかけだった砂の城を残して一斉に立ち上がると、大声を上げながら海とは逆方向に、つまりは街のある方向に向かって駆けだした。

子どもたちは、わああああ、と楽しそうに叫びながら時雨の横を駆け抜けていく。元気だな、と時雨がそれを見ると、そのうちの一人である男の子が時雨とすれ違った後に立ち止まり、不思議そうな顔をして彼女のほうを見た。

「姉ちゃん突っ立って何してるのさ？」

「え？」

「だって走らないと間に合わないじゃん」

「え？」

「あ、分かった！姉ちゃんトロいんだろ。しょうがねえなあ、俺が引っ張って走ってやるよ！」

男の子は何を勘違いしたのか、何も理解できていない時雨の手を掴むと引っ張って走り出した。時雨は目を白黒させながら引っ張られるがまま彼についていく。街と海岸の境界線には、時雨を引っ張る男の子と一緒に遊んでいた子どもたちがすでに到着し、彼の到着を待っているようだった。

「早くしなよー！」

「もうすぐ音楽鳴り止むよー！」

子どもたちがきゃっきゃと笑いながら時雨の手を引く子どもに呼び掛けていた。男の子はわかってるよ、と返事をしてぐんとスピードアップし、そして時雨を連れたままその子どもたちの輪に入った。それから数秒すると、どこからともなく鳴り響いていた不思議な音楽は聞こえなくなっていた。

「ギリギリセーフだよお」

「このねーちゃんがトロいのがわりいんだよ！」

どうやら子どもたちの、駆けっこに似た遊びに巻き込まれたらしいと、時雨はそう理解して、曖昧に子どもたちに笑いかけた。けれ

どもその笑顔は子どもたちには気に入られなかったらしく、ピンク色の服を着た女の子がびしり、と時雨の顔を指指した。

「お姉ちゃんあとちょっとでフケーザイだよ！」
「不経済？」

音楽が鳴り止む前に砂浜からでなければ、こずかいでも貰えなくなるのだろうか。変な遊びだなあ、とまで考えたところで顔をあげ海の方を見て、時雨は固まった。それから二三回瞬きをした後、自分の目を疑った。

なに、これ。

先ほどまでであったはずの美しい砂浜が、きれいさっぱり無くなっていた。

言葉通り、先ほどまで砂浜だった場所は消えていた。すべてが海になっていたのである。砂浜と言う町と海の境界線が消え、町と海がつながったものとなっていた。

嘘でしょ、と時雨は思わずつぶやいた。

いくら大きな波が来たとしても、かなり大きな砂浜だったのだ、すべてが水で埋まるはずもない。そんな大きな波であったなら、町の方まで押し寄せてくるのが普通ではないか。時雨はそんなことを考え、自分の中からわき出てくる驚きを隠せなかった。

それに、それだけではなかった。

先ほどまでは一定の間隔を保って打ち寄せていた波までもが、全く無くなってしまっていたのである。

海は驚くほどに静かになっていた。海からの音がまるでしない。しん、とした静寂の中で、水がその場でびたりと止まっていた。無

人のプールだってもう少しは音がしそうなものである。風が吹けば湖面はゆれる。それは当り前のことではないのかと時雨は目を疑うことしかできなかつた。

そして、時雨がこの変異の理由を子どもたちに尋ねようとしたその刹那、それは起きた。

大きな水音とともに、海の水が動き出し、盛り上がった。そして時雨の目の前で、ぐるぐると模様を描くように動き出す。

まるで意識を持ったように、海は動きだした。

そして海から、噴水のように何本もの水柱が上がり始めた。そしてそれは少しずつ姿を変えて、まるで生き物のようにかたどられていく。竜のようだ、と時雨は思った。竜に似たものを、水が形づくっていくのであった。液体であるはずの水が、まるで固体のように透き通った鱗と長い尻尾を持った生き物になっている。

そしてその生き物は、砂浜にまで広がった海の上を、まるで楽しそうに動き回り始めた。

右に行つては大きく旋回して見せたり、上に行つたと思えば下へ行く。海の中に引つ込んでしまったと思つたならば、今度はいるかのように高くジャンプして見せたりもした。

その光景は美しかった。今まで時雨が見た物の中で一番美しいと言っても過言ではなかった。

時雨は、それを見て目を見開き、思わずそこにへたり込んだ。美しさに腰を抜かしたのではない。直面しなければならぬ現実を突き付けられて、立つ力も出なくなったのである。

私は知らない。

時雨は呟いた。

海の冷たさは時雨の知っているものだった。人々の話している言葉は時雨の親しんでいるものだった。けれども。

やっぱり、と半场諦めのように思うとともに、時雨はああ、と声をもらした。

違和感にはずっと気付いていた。使っている文字も、紙幣も違う。ならここは外国。そう考えていた。それがどれだけ非現実的といえども、時雨が長く眠っている間に移動させることは不可能ではない。けれども、けれども外国なら、どうして言葉が通じるのだろうか？通じない。通じるわけがない。

だから、そうじゃないのだ。

ここは違う。時雨はやっと、理解せざるを得なかった。違うのだ。外国など比ではないほどに。いままでいた世界とは、きつと根本的に違うところに自分はいるのだ、と。

時雨はまるで自分に言い聞かせるかのようにそう考えて、そして下唇を噛んだ。

「海の神様のお出ました！」

「フケーザイした人間は飲みこまれるぞお！」

子どもたちがわいわいと騒いでいるのも、もう時雨の耳には入らなかった。

はは、と時雨の口から乾いた笑い声が漏れて、けれども時雨は自分がそんな笑い声を発したことも気がつかなかった。

ただその場に座り込んで、美しい身体で動き回る水の神様と言うものを、見つめ続けていた。

5 雨音が近づく

「病人がどこをほつつき歩いてたの！」

女性の叱る声に、時雨は首を竦めた。

知らない世界に来てしまったという、現実には直面して途方にくれながら時雨が選択したのは、とりあえず看病してくれた女性がいる家に帰ることだった。今の時雨の居場所と言えるのは其処しかなかったからである。

朝方に飛び出してきた場所に、時雨が恐る恐るといった具合に戻ってみてドアを開けると、お粥を作ってくれた女性はいの一番に入口まで走ってきて大声でそう怒鳴った。女性は腰に手を当てながら目を吊り上げ、いかにも怒っていますと言うように口をへの字にしている。驚いてびくりと一瞬体を震わせた時雨は、その剣幕に押しされて素直に謝った。

すると女性は腰に当てていた手を元にもどし、本当にもう、と言いながら安堵の色を顔にだした。どうやら本気で時雨を心配して、怒っていたようだった。

「倒れて困るのは貴方なのよ」

まるで自分のことのように悲しい顔をしながら話されて優しい言葉をかけられて、時雨は本当に申し訳ない気持ちになった。自分の知らない風景に驚き、その感情だけで何も言わずに飛び出してきてしまったのだから非は時雨にしかない。

「ごめんなさい、その、心配させるつもりはなかったんです」

「……しょうがないわね、もう。分かったならいいの」

その謝罪に彼女は怒るのを止め、小さい子にするように時雨の頭をぽんぽん、と撫でた。時雨はその行為にこそばゆさを感じながらも、昔に母親にされていたような、その懐かしい感覚に嬉しくなつて小さくはにかんだ。

「さあ、夕食にしましょう」

そう言つて女性は時雨を時雨を家の中に招き入れ、部屋の中へ案内してくれた。

食事をとるための部屋は隣の部屋がキッチンになっているようで、女性は時雨を部屋に残してそちらへ行つてしまった。部屋には中央に木でできた丸テーブルがどしんと置いてあり、それを囲むように

四つの椅子が並べられている。

そしてその椅子のうちの一つにはすでに人が座っていた。時雨の視線に気がついたのか、時雨の方を向いた。赤茶色の瞳が印象的な顔の少年だった。年恰好からして十五歳ほどかもしれないが、あどけなさを残した顔つきをしていて、その大きな目とお揃いの赤茶けた髪の毛は少年が動くたびにさらさらと揺れて色白な頬に振れては離れを繰り返していた。

「ここにどうぞ」

少年は自分の向かい側の席を時雨に促した。そこに時雨が腰かけると、少年は控えめながら時雨に対して笑いかけながら会釈をした。誰だろう、と時雨が疑問をもったちょうどその時、少年が先に口を開いた。

「はじめまして、僕はユチカ。ラミノ姉さんの弟だよ。君の名前は？」

「あ、はじめまして。時雨です」

「シグレ？ 発音が難しいなあ」

時雨よりも年下であろう少年ユチカは、柔らかい口調で時雨に笑いかけながら言葉を紡いだ。年齢にしては大人っぽい話し方である。ラミノというのは女性の名前なのだろう。そういえば、ラミノは弟が時雨を助けたのだと話していたはずである。

特に話すことが見つからないのか、ユチカは時雨に体は大丈夫なのかとありきたりの質問をしたあと黙ってしまった。その場を、隣の部屋からかすかに聞こえてくる何かを炒める音だけが支配する。

静かな時間に多少の居心地の悪さを感じながらも、時雨も何を話せばいいのか分からずに視線をさまよわせると、壁に海の絵が飾つてあるのを見つけた。この町の海だろうその絵は、実物よりは劣る

とも、十分に綺麗な様子を精巧に描くことができている。海を実際に見る前であったなら、この絵を見ただけで時雨は感嘆の声を上げていただろう。

その美しい景色の絵を見て、時雨はこの家に帰ってくる前に考えたことを思い起こした。

水の神と呼ばれていた竜が海の中に戻り、海の水が少しずつ引いていき、白い砂浜が元通り姿を現した後も、暫くの間時雨はその場を動くことができなかった。長い間座り込んだまま呆け、いつの間にか周りが暗くなり、街の商店が店じまいをしたあと、やっと時雨の脳は働いた。

私の知らない力が、この世界にはある。

時雨は未知の出来事に遭遇して、そう確信していた。科学技術の発達か、魔法や魔術の類か、それは何であれ、その力があると言うことは時雨にとって重要なことだった。時雨をこの場所に連れてきたのだからその力に違いないのだし、連れてきたということは帰れる可能性だって十二分にある。

今の時雨が自信を持って言えるのは、帰りたいという思いだけだった。そして帰るためには、その力を知らなくてはならない。

時雨はそこまで考え、目の前に座る少年を見た。ただ沈黙を続け

るくらいなら、この時間を使って彼に多くのことを聞いた方がよっぽど有効的な時間の使い方である。

暫く逡巡した後、時雨は沈黙を破った。

「あのさ、弟ってことは、倒れてる私を発見してくれたんだよね、ありがとう」

どういたしまして、とユチカの返事が返ってきて、時雨は当たり障りのないことから質問を投げかけることにした。

「私ってどこに倒れていたの？」

「街の端の森だよ」

「私どんな風に倒れてた？」

「全身濡びしょ濡れで、地面に倒れてたんだ」

あれだけ雨に打たれていたのだから、濡れそぼっていたことは当たり前前と言えば当たり前だろう。時雨はそこでふと、気になることを思い出した。

「どうして私を助けてくれたの？」

時雨は自分で、自分が怪しいことこの上無いことを、街に出てからの無遠慮な視線で理解していた。そんな怪しい人間を、普通は自分の家に止めて看病するものなのだろうか、と疑問いつ疑問が湧いてくるのは当然のことだった。

そのもつともな質問に、なぜだかユチカはちらりと台所の方に視線をやった。

まるで台所にいるラミノに聞かれてはいけないようなその動作に時雨が首を傾げると、ユチカは眉根を寄せて何かを考えるそぶりをし、そして首のあたりを撫でながら、ぴん、と指を一本立てた。

「その質問に答える前に、約束して欲しいことがあるんだ」

「約束？ なに？」

いきなりの提案に、時雨は不思議に思ってきょとんとした。難しいことじゃないよ、とラミノは言いながらも、聞かれないかのように声をひそめていた。

「今から話すことは、ラミノ姉さんには内緒にして」

「ラミノさんに？ どうして」

「あの人は何も知らないから」

含みを持たせたようなユチカの言い方ではあったが、時雨は首を傾げながらも頷いた。ユチカは絶対だからね、と念押しをした後、指を元に戻しながら質問に対する答えを言った。

「まとめて言うてしまえば

君が異世界人だからだ」

異世界人？

ぼかん、と時雨は一瞬間抜けな顔をした。

時雨の中になんとなく、異世界と言うと人間がいらないような、未確認生物のようなものが人間以上の知能を持って暮らしているような思いがあつたために、時雨は自分自身にそんな言葉が当てはまるとは考えてもみなかったのである。

けれども、すぐに納得をした。

言われてみれば、なるほど異世界と言う言葉は、今の時雨にぴっ

たりの言葉だった。時雨はこの時、自分のここでの立場が異世界人だと言ったことをやっときちんと自覚したのである。

そしてそれから時雨は、自分に一縷の希望が見えたような気分になった。

ユチカは、時雨が異世界人であると言ったことを、まるでさもありなんというような雰囲気でも口にした。つまり、異世界と言った言葉はこの世界では日常用語であり、元の世界に帰るのは簡単なのではないかという望みが時雨の中に生まれたのである。

「私は帰れるよね？」

思わず弾むような口調になりながら時雨はユチカに尋ねた。今までのものから趣向が異なったものに様変わりした質問に、今度はユチカが戸惑ったように言葉を発した。

「帰れるって？」

「私の世界に、帰れるんでしょ？」

「まあ、方法はあるよ」

縦に首を動かしたユチカに、ああよかった、と時雨は歓喜でため息を吐いた。ほっとしたと言い換えても良いだろう。まるで肩の力がぬけてしまったようで、時雨は椅子の背もたれに寄りかかった。帰れなかったらどうしよう、と言っ焦りから思った以上に神経をすり減らしていたらしい。

「その方法って、私はどうすればいいの？」

「それは…。その前に、さっきの話の続きだけねど」

せっかちに、嬉々としてした時雨の質問にユチカは答えず、話を

ひとつ前に戻した。帰る方法を早く聞きたい時雨は不満に思ったが、答えてもらう立場としては文句を言うわけにも仕方なかった。しかも先ほどの話を他の質問でいきなり打ち切ったのは時雨である。さっきの話と言えば、時雨が質問を変える前に話していたことなのだ。どうして私を助けたのか。時雨はそう聞いたのである。

そこまで思い起こして、時雨ははたと疑問に気がついた。先ほどは元の世界に帰れる期待によって時雨は気にもしなかったが、ユチカは時雨が異世界人であるから助けた、と言ったのである。つまりは時雨という異世界人に、ユチカは何か用があるのだ。

「君が異世界人じゃなかったら、病院に連れて行ってそこでお終いにした。君を家まで連れてきて看病したのは、君にお願いがあるからだ」

「お願い？」

「実は」

ユチカがそのお願いを言いかけた時、ラミノが皿を運んで部屋に入ってきた。それを見て、ユチカは口をつぐむ。ラミノさんには秘密にする、と言う約束を時雨は思い出して、時雨も一旦口を閉じた。そう言えば、この約束だっておかしなものである。時雨ははてなマークを頭に浮かべながらユチカのほうを見たが、彼はもう今話の続きをする気は無いようだった。

また後で、と口の動きだけで言われ、時雨はこくりと頷いた。

6 雨合羽の綻び

控え目なノックに時雨が返事をすると、ドアは静かに開けられた。立っていたのはユチカ。時雨は部屋の中にユチカを招き入れた。

夜も深くなつてから雨が降り出して、屋根に雨が当たる音が部屋の中にまで侵入してきていた。

「おじゃまします」

ユチカはそう言つて時雨の部屋に入り、椅子を引き寄せてそこに座った。ベッドの淵に座っていた時雨も、ユチカと机を挟んだ向かいに座りなおす。夕食の前に行っていた話の続きをするためにやってきたであろうユチカは、どこか迷いを持った様子で視線を斜め下に向け、なかなか話を始めようとしなかった。

夕食前に話した時とはどこか違う雰囲気、時雨は戸惑った。雨の音と相まって、重苦しさが部屋中に立ちこめていた。その雰囲気に居心地の悪さを感じた時雨が身じろぎをすると、その音が合図になつたかのようにユチカが顔をあげ、時雨を見た。

「どこから話せばいいのか迷ってるんだ」

ユチカはそう言って、首の後ろを撫でた。

「話さなきゃいけないことを、部屋に戻ってからずっと考えていたんだけど……」

どうも齒切れが悪かった。明らかに喋ることに対して腰が引けているユチカの様子に、時雨の心に不安がもくもくと湧き出始めていた。

一体ユチカは何を話すのだろう。お願いとはなんだろう。私はどうやって帰ればいいのかだろう。時雨には聞きたいことが沢山あったが、それを口に出すことも憚られるような重たい空気があった。

またユチカが首の後ろを撫でた。どうやら癖であるらしい。

「とりあえず、僕のお願いから話すよ」

時雨が頷くと、ユチカは一呼吸置いてから口を開いた。

「僕は、君に力を貸して欲しいんだ」

「チカラ？」

「そう、力。君の力が僕には必要なんだ」

それがお願いだろうか。

暫く続きを待ってみたが、ユチカのお願いはそこから続きは無いようだった。力。そんな抽象的な言葉で話されても、時雨には何の

事だかまったく分からなかった。力にだっているいろある。

体力も権力も、知力だって力だろう。けれども時雨は自分が、そのどれをもそんなに持っているように思えずに戸惑った。

「私の何の力を、貸せばいいの？」

当然の疑問である。ユチカはそれに対して、眉根を寄せると悲しそうに言った。

「それは、分からないんだ」

ユチカの返答に時雨はもっと困ってしまった。貸してくれと頼んだ本人が、何を貸して欲しいかわからないのは本末転倒である。時雨がそう言うと、ユチカは困ったような顔をして、それから順を追って話そう、と言った。

僕の兄の話だ、とユチカは言葉を紡ぎだした。

「僕には兄がいるんだ。僕より十ほど年上で、今は多分、生きていれば25歳になる。兄の結婚相手がラミノ姉さんで、つまりは僕と姉さんは義姉弟。二年前までは三人で、もう少し南の方にある町で暮らしてたんだ」

「ここから少し長くなるよ。そう前置きして、ユチカはゆっくりと語り始めた。

僕らが住んでいたのは、サメイユという名の花が咲きあふれている暖かい町だった。黄色の花が町の一番の自慢、そんな町に僕は住んでいた。僕はまだ仕事に就ける年ではなくて、学校に通いながら家の手伝いをしたり友達と遊びまわったりしていた、まだそんな頃のこと。

ラミノ姉さんは家事をして、兄が仕事をして、毎日の暮らしを送っていた。裕福ではなかったけれど貧しくもない。そんなどこにもある一般家庭。

そんな生活が続くものだと思っていたし、何も疑ってなどいなかった。けれどそれは唯の願望だったってこと、今の僕なら分かる。

兄の仕事は大工だった。船を作ったり家を作ったり、家具や遊具を作ったりしてたんだ。兄は腕のいい方だったから、仕事に困るということはなかった。けれどだから、兄には他の大工よりも少しレベルの高い仕事が舞い込んでくるのが偶にあった。貴族の家や神殿や、そういったものを建てることに関われたんだ。

それは普段の仕事よりもお金が入ってくるから、兄は勿論その仕事を受けていた。そしてある日、大きな仕事の一つ入ってきた。

一年間を通しての仕事だった。水の神様を祭るための神殿の、大規模な修復工事。あの神殿はこの街がすっぽりと入るくらいに大きいから、腕のいい大工を全国から集めているみたいで、今までのものよりもずっといい仕事だった。神殿の場所はずっと遠くにあつて三ヶ月に一回しか家に帰ってくることはできなかったけれど、兄は勿論二つ返事でそれを受けた。僕らは笑顔で、出かけていく兄を見送った。

そして三カ月後、僕は久しぶりに帰ってきた兄を見て驚愕した。

ぱっと見て、何か変わったというわけではない。ひどく疲れていたらけれど、それは仕事と長旅のせいだと思えば納得ができた。変わったのは、兄の眼、瞳の鋭さだ。三ヶ月前とはあまりに別人のようだった。怖かったんだ。兄を怖いと思ったのはそれが初めてだった。ラミノ姉さんも僕と同じことを思ったのか、今受けている仕事を止めようと兄に提案した。けれど兄は、その提案に対して決して首を縦に振らなかった。それだけじゃない。兄は、仕事のことを一言だって語らなかつたんだ。まるで拒否反応を起こすかのように、その話をするとう口をつぐんだ。神殿での仕事は、神殿内のいろいろなものを目にするから、守秘義務があるのは分かる。けれども兄は、仕事について、一緒に仕事をしている仲間の名前さえも、一切発しようとはしなかつたんだ。

二度目に帰ってきたとき、つまり仕事を始めて六カ月後、見た目も少しづつ兄は変わっていた。一目で分かるほどに痩せていたし、前のようにたくさん笑うこともなかった。ただ三か月分のお金をラミノ姉さんに渡すと、自分の部屋に戻って出てくることのほうが少なかった。僕もラミノ姉さんも、兄に一体何が起きているのか全然わからなかった。

そして三度目に帰ってきたとき、兄からは生氣さえも感じられなかった。ラミノ姉さんはその兄を見て思わず泣いてしまうほどに。僕は兄が本当に自分のあの兄なのかと、信じられなかった。

いったいなんの仕事なの、お願いよ、後生だから止めて、というラミノ姉さんの願いさえ、兄は全く聞く耳を持たなかった。僕は兄が怖くて、話しかけることができなかった。どうなってしまうのか、そればかりを考えた。そしてまた仕事に出掛けなくてはならない日、兄が帰ってきてから初めて、自分から僕に声をかけた。

そのとき、兄は僕に一つのブレスレットを手渡したんだ。どこにでもありそうな、石のブレスレット。これを絶対につけている、兄は僕にそう言った。学校に行くときも、お風呂に入るときも、寝るときも、何があっても絶対に外してはいけない。そう言った。僕はそれを忠実に守って、毎日つけていた。

そして二ヶ月と半分くらいたって、兄の仕事が終わるまであと一週間に迫った夜のことだったよ。ブレスレットから伝わる熱で僕は目を覚ました。とてつもない熱さを持ち、腕につけていたブレスレットは煌いていた。驚いて思わず外そうとして、僕はそのブレスレットから文字があふれ出していることに気がついた。文字はほとんど出てきて、僕の腕に張り付き始め、そして僕の腕に文章を作っていた。

僕は腕に模様のように浮かび上がっている文章の最初の一行を読み、そしてその場で固まった。

“愛するユチカへ”

“これをお前が読んだとき、それは俺がもうお前に一生会えなくなっただろう”

“もうきつと感づいているとは思いますが、俺のしている仕事は最悪のものだ。この世にあってはならない、おぞましいものだ。俺は秘密を知ってしまった。もう助からない。俺は監視されている。三か月に一回、家に帰るときでさえも。最後の言葉を言うために、監視の目をどうにか盗んでこれを書いている。

子どものお前にこんなものを託してしまつてすまない。だが、三十人余りの大工仲間たちがこれからどうなるか分からないであろう悔しさが、俺にこれを書かせている。

水の神を奉るエニアラ教の第一神殿には、暗い裏がある。俺たちの水の神を冒瀆する行為だ。それによつて、信者たちは殺されている。お前は宗教に深くハマりこむな。そして出来れば、真実を暴いてくれ。

多分、俺は事故死をしたと報告されるだろう。それは嘘だ。きつと俺はこれから、ここで一生働き続ける運命にある。だが、ラミノ

には死の真実を伝えなくていい。そのほうがあいつにとって幸せだろう。

お前たちの幸せを願っている。”

“愛を込めて リイス”

手紙の通り、兄が帰ってくるはずの日にやってきたのは一通の死亡通知だけだった。資材の下敷きになって死んだってね。なのに遺体も骨もなかったよ。その後稼ぎ手がいなくなった僕たちは家賃を払えなくなつて、僕たちはその街をでた。そしてこの街に引越してきたんだ。ラストエウの町。この街に引越してきたのは働き口があったからだけじゃなく、大きな図書館があったからだ。僕はつとと神殿について調べていた。兄さんの無念を晴らしたかった。兄さんを助けたかった。

そして君を見つけ、一つの手がかりに辿り着いたと思った。

君は僕が待ち望んでいた人間だったんだ。

実は兄からの手紙は、あれで終わりではなかった。兄の名前の後に、もう数行書いてあった。

“大工仲間に、まじない師の家系出身という稀有な奴がいた。名前はラングサンドラ。そいつに協力してもらってこれを作っている。真実を暴く手がかりになるはずの、まじない師の預言をここに記す。

汝の弟は光の中から現れる異なる世界の女の力によって、真実を白日のもとへ導くであろう。

ユチカ、この女を見つけてくれ”

僕はずっと待っていた。

「そして僕は、光の中から現れた君を見つけたんだ」

そこで、ユチカは一端言葉を切った。時雨の顔をまっすぐに見て、彼は話を続けた。

「正直、少しだけ半信半疑だったんだ。異世界の人間を呼び出すのは、神に仕える人間の中でも数人の上官にしかできない行為だから。君が現れた時はすごく驚いた。けれどそれで、兄の話も真実味がずっと増した」

「ちよっと、ちよっと待って！」

時雨は思わず話を止めていた。当たり前だろう。お願いというものをもつと時雨は簡単なものだと考えていた。それが何なのか見当

もつかなかったが、それにしたってまさか、そんなにも壮大なものだとは思いつきもなかったのである。

まだきちんと話の内容は理解できていないし、彼の兄がおかしなことに巻き込まれたとか、行方不明だとか、そんなものの実感も何も、時雨には湧かなかった。何よりも知らない単語がたくさん出てきてしまつて時雨の頭は混乱していたし、それに、今言われた言葉も時雨の脳内をかき回すのには十分だった。

「今、ユチカ、異世界の人間を呼び出すのは神に仕える数人しかできないって言った……？」

時雨の言葉に、ユチカはああ、と顔を曇らせた。その表情を見て悟つた時雨は、一瞬にして心がずうんと重たくなるのを感じた。時雨が帰ることは、難しいことなのだ。

ごめん、とユチカは言った。

「騙すつもりは無かつたんだ。僕は、夕食の前に君と話すまで誤解していた。君は神に使わされて、進んで僕の手助けをしてくれる存在だと思っていたんだ。けれどいざ話してみると、君は異世界に帰りたいと思っているだけの、普通の人間だった」

時雨が普通であると言うことは、ユチカにとっては大きく期待外れだったのであった。正直に言えば、ユチカは異世界人が来てくれれば、ことが大きく変わり始めるとさえ思っていた。だから、いきなり異世界に飛ばされてしまった時雨同様、ユチカも途方に暮れていたのである。

「でも、まじない師が言ったんだ。神から預かつたその言葉に嘘はないし、僕は君の何かの力を必要としてる。だから、お願いだ。僕を、どうか助けて欲しい」

ユチカは時雨に向かってぐい、と頭を下げた。そんなことを言われても、と時雨は戸惑う。ただでさえ自分のこれからも見えていない状況で、時雨は返事を返すことができなかった。

ユチカやミラノが、悪い人間には見えなかったし、自分が利用されようとしているとは時雨は感じなかった。例えばここが異世界ではなくて、時雨の心にもう少し余裕があれば、ユチカに手を差し伸べたくなるくらいには時雨はお人よしなのだ。けれど、

どうしたらいいのかわからない。

時雨はひたすらそう感じていた。何もわからない。むしろ、助けて欲しいのは時雨自身であろうとも思う。

重たい空気が嫌で、時雨はそれを逃がそうとするかのように立ち上がって窓を小さく開いた。途端に雨の音が部屋の中まで大きく響き始める。雨音は部屋中に反射した。

冷たい空気が入ってきて、ふう、と時雨は息を大きく吸い込んだ。肺の中まで冷えていき、その冷たさは少しだけ時雨を落ち着かせた。ふい、と視線をユチカの方に向けた時雨は、机が小刻みに震えているのに気がついた。見れば、机の上に置かれたユチカの手が、小さくとも小刻みに震えていた。

下げた頭の下から見えるその手は、男としてはまだ成長途中の、少年の手だった。手首には薄い赤色のブレスレットが、光沢をなくしてぶら下がっていた。

ユチカが震えている。まるで大人のように話すから忘れてしまっていたが、ユチカはまだ時雨よりも幼いのだ。不安なのだ。そして兄を助けたいというその一心で、毎日を暮らしているのだ。

ああ、と時雨はまるで心のなかにすとんと、何か落ちてくるような気がした。時雨は唾を飲んで、ゆっくりと口を開き、言葉を発しようとした。

けれどその時、小さく開けた窓の外、雨音に混じって聞こえてきた声に、時雨は驚いて言葉を紡がずに固まった。

時雨は窓に耳を寄せながら、外から聞こえてくる音に耳を澄ました。ざあざあと土砂降りの雨音に混じって、かすかに人の話す声が聞こえてきていた。

時雨の心臓はゆっくりと、しかし確実に大きく速く、音が高鳴っていく。

「なにやってるの？」

顔をあげたユチカが訝しむような声をだす。けれど時雨には、ユチカの声が耳に入らなかつた。時雨は外から聞こえてくる声を聞きたろうと必死になっていた。

“いたか？”

“いない。次はこの家ね”

私はこの声を知っている。

一組の男女の声。時雨の顔から血の気が引いた。雨の中に混じっている声でも、否、雨の中に混じっているからこそ時雨はその声が一体誰なのかが分かった。

時雨の頭に、記憶が鮮明に蘇る。

追いかけられた恐怖。掴まれた手の厚さ。飛んでいった傘。私を追いかけてくる背の高い女。ガタイの良い男。

今まで話していたことも一瞬のうちに時雨の頭から消え去っていき、じわりじわりとあの時の恐怖が時雨の中へ染み出して来ていた。

“この街にあの女がいたって証言は出てるんだ”

“まったく、どこへいったのよ”

私を探している？

そう気がついた瞬間、時雨の心臓の音の高鳴りがピークに達した。内側から胸を叩かれているような感触に時雨は思わず自分の胸を抑えた。二人にこの音が聞こえやしないかと不安になって、時雨はどうにか自分の心臓を落ち着かせようとした。

声は少しずつ近づいてくる。雨の中を歩く二人の姿が窓の隙間から見えるようになっていた。

外から見えてしまつてはいけなないと、時雨は部屋を明るくしていた蠟燭を引き寄せ慌てて吹き消した。 途端に部屋の中が暗くなる。

「どうしたの」

そう言つて駆けよつてきたユチカが何か言いかけたのを見て、時雨はその口を自分の手でふさいだ。目を白黒させるユチカに向かつて、喋るなどと言う意思表示を込めて首を横に振る。

窓の隙間から下を見る時雨の視線の先にユチカも気がつき、不思議に思いながら二人の人間を見た。

二人の男女は傘を差しながら話し込んで歩いている。暗がりでも傘の色が何色かは分からなかったが、その傘には白色で何か模様が描いてあるのが見て取れた。

象形文字のようなその模様を見止めると、途端にユチカ表情が険しい色を帯びた。そしてユチカの手が素早く伸び薄く開けた窓は音もなく閉じられた。驚いて時雨がユチカの顔を見上げる。

小さな小さな声で、ユチカが時雨に尋ねた。

「シグレ、君はあの二人と知り合いなの？」

まるで二人と知り合いであることを咎められるような言い方のその問いに、今度は時雨が表情を険しくした。

「ユチカは、あの二人を知ってるの？」

「知っているわけじゃない」

歪めた顔のままユチカが続けた。

「けれど、あの傘に描かれていた紋章」

傘、と言われて、時雨はその傘を思い起こした。二人の声ばかりに注意を払っていたせいかわりにあまりきちんと覚えていなかったが、円のような模様が描かれていた。

「あの傘の紋章こそ、エニアラ教の上位神官の証。水の神の神殿に
関わっている証拠だ」

僕の敵かもしれない人間だ。ユチカはそのセリフに、と時雨は心
の中でまさかと呟いた。そんな偉い人間が、時雨を追いかけた拳句
に攫おうとしたのか。一体何の目的で？

リン。

そのとき家の玄関に備え付けられている鈴が鳴る音がした。もう
夜も更けている時間帯に普通鳴るものではない。時雨はバツと顔を
あげた。先ほどの会話から分かるように、彼らは家々を回って時雨
を探している。

声が聞こえなくなったからか雨音が遠ざかったからか、時雨の心
臓は少しだけ落ち着きを取り戻していた。しかしそれは、時雨の緊
張が弱まったという証拠にはならない。

呼び鈴に答えようと部屋のドアを開けたユチカの服の裾を、時雨
はとっさに掴んだ。

「私にはここにいない……！」

時雨の口からとっさに出てきたのはその言葉だけだった。時雨の言いたいことをユチカは理解できなかったらしく、どういう意味だと聞き返す。

「あいつらに、攫われそうになった……」

不安によってか、時雨の声はか細かった。それでもその尻すばみしていく言葉をユチカは聞き取ったようで、驚きと疑問の色を顔に浮かべた。

リリン。

もう一度呼び鈴が鳴らされた。ラミノの部屋のドアが開く音がして、僕が出るよ、今行きます、と大声でユチカは言った。ラミノに先に行かれては時雨のことを言ってしまうだろう。ユチカはちらりと時雨の顔を見た。

「僕に任せて」

ユチカは時雨にそう告げると部屋から出て行った。二階にある時雨の部屋を出たユチカが階段を下る音や玄関を開ける音を聞いて、時雨もそつと部屋をでた。

ラアンもドアの隙間から顔を出して不思議そうな顔をしていたが、ユチカが行ったのを見て部屋の中に引っ込んだ。

時雨は足音を立てずに歩くと、階段の上から耳を澄ました。男の声は大きく、時雨の居る所まで容易に聞こえてきた。

「夜分遅くに済まない。急ぎの用なんだ。俺はエニアラ教神官のオレムという。黒髪黒目の、変わった服装の少女を見なかったか？」
「変わった服装？どのような？」

「身体に張り付いているような青色のズボンを穿き、上半身はニスクの花のような薄いピンク色の服を着ている。昼間この街を歩いていたと証言がでているんだ」

ユチカは時雨の服装を頭の中に思い描いた。確かに時雨はそんな服装をしていた。とは言っても見たから分かるのであって、もしも時雨に出会う前だったら身体に張り付いているようなズボンというものが見えなかっただろう。

どう台詞を返せば自分に都合の良い答えが返ってくるのかと思案しながら、ユチカは口を開く。

「張り付いたような、ですか。僕は見ていません。その人がどうかしたのですか？」

「重犯罪人だ」

「重犯罪人……？」

「水の神様への冒瀆罪だ」

ユチカは男、オレムの言葉に暫く返事を返さなかった。いや、返さなかったというよりは返せなかったという方が正しいだろう。

ユチカは絶句して、言葉が出なかったのだ。

「……冒涇、ですか？」

一応の聞き間違い、言い間違いの可能性も考えてユチカはオーレムに聞き返した。あまりの驚きで、言葉はゆっくりと慎重に喉から生まれた。

先ほどまではどうにか自分の聞きたい話を聞いてやろうと思っていたのに、今ユチカはそんなことを忘れて口をきいていた。

「驚くのは分かる。冒涇罪はめつたにないことだからな。しかし四日前のことだ。神殿で罪を犯し、そして神官の手をすりぬけて逃走した。見かけたら近くの神殿の神官に報告してくれ」

「……わかりました」

その台詞を合図にオーレムは扉の外側に戻っていった。ドアに付けられた飾りが揺れるのを見ながらユチカは大きく息を吸い、そして長い時間を掛けてそれを吐きだした。

階段を上がっていくと、その一番上で時雨が待っていた。眉間の皺はどうやら不安から来ているらしく、今にも泣きだしそうである。人を探していたらしいよとだけラミアに告げに行くと、ユチカは時雨の部屋に戻った。

「冒涇罪ってどんな？」

どうやら時雨は会話をしっかりと聞いていたらしい。部屋に入っ
てすぐに時雨がそう聞き、ユチカは顔をあげた。

「冒瀆罪」

ユチカは舌の上でその言葉を転がした。言い慣れない言葉だ。時雨の視線を受けながら、ユチカは口を開いた。

冒瀆罪。

その言葉が使われることはまれだ。前回にその罪が問われる事件が起こったのはユチカの記憶が正しければ二年前だった。それも国の東端に住む男が冒瀆罪を犯して捕まったというのを風の噂で聞いただけのことである。

そしてその罪の内容は、誰にも知らされることはない。ただ冒瀆罪と言うその名前だけがふわふわと、人々の恐れるものだという感覚を伴って国中に散らばっているだけのことだった。

ユチカが知っているのは、冒瀆罪はこの国で一番重い罪であり、その罪を犯した者は生きることすら死ぬこともできない世界へ飛ばされるのだと、学校で習ったそれだけである。

水神様の悪口を言っただけであったり、神官を笑い物にしても冒瀆罪にはならない。それくらいのことなら罪に問われることのほうが少なく、問われても侮辱罪である。

水神様や神殿の儀式を邪魔したり、もしくは神殿を破壊したりする行為であったり、明らかに反水神派の人間がやったと思われる行為であっても不敬罪とみなされるはずだった。それほどまでに冒瀆罪と言う罪は、重たい。

けれども、時雨が罪に問われているのはその冒瀆罪でなのがある。

「何だそれ……」

時雨が明らかに困惑の色を目に宿して呟いた。私何もしてない。時雨はそうも言った。

「分かってるよ。あの男、オーレムは四日前に、と言ってた。その時まだ君はこの世界にはいなかった。三日前に光の中から現れたのを僕は見てるんだ」

「そうだよ。そもそも私、あいつらに追いかけられたせいでここに来たのに」

「え？」

「あれ？私言っでなかったっけ」

時雨はユチカにここに来るまでの経緯を語った。雨の道。背の高い女。逃げる。追いかけられる。捕まる。逃げる。光に飛び込む。

本当なのか。

ユチカはそれを聞き終えてすぐにそう呟いた。時雨の言葉を疑ったのではない。その話の内容に驚きが隠せなかっただけだった。

「じゃあ、オーレムたちは君の世界にいたの？」

ユチカの質問を聞いて、時雨もはつとしたようだった。そうなのだ。この世界では、異世界に行けるのはごく限られた神官のみ。

「……世界を飛び越えられる、すごい神官？」

「その可能性は、高いね」

時雨の言葉にユチカも同意した。上位神官か、もしくはその神官に強いつながりを持った人間か。それ相応の地位にいる人間に間違いはないのだろう。その人間が時雨を探し、あまつさえ重罪中の重罪だと嘯いてまていたのだ。

ユチカは考えていた。まじない師の預言。エニアラ教の闇。光の中から現れた異世界の女。少女を追いかけるエニアラ教の神官。

つながっているのか。

8 そば降る雨が見送る

「ええっ」

ラミノの大きな声が部屋の中に響いた。本当なの、と語るその口調からは悲しさがにじみ出ている。時雨の言葉を聞いてぐいと身を乗り出したせいで、ラミノのくるくるとした髪がスープの中に入りそうだった。

ユチカは何も言わずに黙って朝食を口に運んでいたが、前日遅くまで話し込んでいたせいで寝不足気味なのか、時雨とともに目の下に隈ができていた。

「はい、今日出発しようと思います」

「本当にホントなのね？」

「今まで良くしてもらってありがとございました」

時雨はこれから起こる出来事に対する罪悪感を抱えながら、頭を下げて感謝の気持ちを精いっぱい形にした。

話は前日の夜中に遡る。

「シグレ、君はこの町から逃げるべきだ」

雨は降りやまず、相変らずに屋根に落ちる雨音が部屋の中に響いていた。しかしその音はもう静寂を引き立てるもの以外の何物でもない。

「この町は小さいし、君は町を歩いたから、服を変えたって顔を覚えてる人がいるかもしれない。そうなればすぐに話は伝わってしまうだろうから」

時雨はその言葉に賛成した。街をでて行くあても何もあるはずがなかったが、家から出ないことも存在を悟らせずに暮らしていくことも難しいだろう。それに、他人の家にずっと厄介になるわけには行かないのだ。ここについては罪人としてすぐに捕まってしまう。

「それで、僕も手がかりを掴むために一緒に行く」

赤茶色のユチカの髪がさらりと彼の頬を撫でるのを見ながら、時雨はそれに返す適当な言葉を見つけられなかった。その沈黙をなにととったのかは分からないが、ユチカは話を続けた。

「シグレと出会うべくして出会ったのは、まじない師の預言からも分かってるんだ」

力強くユチカがそう言うのを聞いて、シグレはそういえばと疑問

に思った。今までは他のことが強烈過ぎて流してきてしまっていたが、まじない師というのは占い師のようなものなのではないだろうか。

その言葉は予想に過ぎない。時雨は占いが嫌いなわけではなかったが特に信じているわけでもなかった。占いとはそうなたらいいという希望的観測を教えてくれるもの、希望を持たせるためのものだというのが時雨の認識だった。

だから時雨はまじない師の言葉をそんなに信じて良いものなのだろうかと考えたのである。

「良いの？ その、まじない師の言葉を全面的に信じても」

「どうして？ まじない師は水神様のお告げを貰っているのだから真実しか言わないじゃないか。ユチカの世界ではまじない師の言葉を信じられなかったの？」

まるでどうしてそんなことを聞くのかとでも言うようにユチカが言うものだから、時雨も困ってしまった。ユチカは時雨から見て年齢よりもずっと理知的に見えるのだけれども、そういった類を強く信じる性質なのだろうか。

「占いは、その、希望を抱くためのものだし……」

「まじない師は占い師とは違うじゃないか」

「え？ でも、私の世界ではまじない師と言えば占い師みたいなものだったし……」

喋りながら自身を無くして尻すぼみになっていく時雨の言葉を聞いて、ユチカはますます不思議そうな顔をした。

「まじない師がないで、君の世界ではどうやって水の神様からの預言を預かっていたの？」

「だって、私の世界に水神様はいないよ」

「え？」

「あ、水関係の神様はいるかもしれないけれど、だって神様なんて、もやっとしたものだし、人それぞれ信じるものは違うでしょ？」

「もやっとしたもの？」

「えーと、なんて言えばいいのか…。そうだ、概念的な感じじゃないの？水の神様だってそうで、信じる人が神殿を作ったり神様に願ったりして海から波が消えたりするわけで……」

どうも話が噛みあっていない様に思える会話である。なんて言えばいいのか時雨にはよくわからなかった。そもそも大体時雨は神様に着いてや宗教についてなど真剣に考えたことがないし考えてみようなどとも思わなかった。

けれどもユチカは違うようで、時雨の言葉が理解できていないようでもあった。

「何言ってるの、違うよ。水神様はいる」

「居るって、概念上のものじゃないなら、どういうこと？」

「海から波が消えるのは誰が何をしたわけでもない。僕らが願わなくても儀式は起こるよ。水神様がやってるんだから」

「え、は？ あれはその、宗教関係で使われる魔法のようなものじゃないの？」

「魔法？ そんなもの、この世界には無いよ」

時雨は一生懸命にユチカの言うことを理解しようとしていた。けれども分からないものは分からないのである。ユチカも噛み合っていない話に困惑しているようだった。ユチカは時雨の考えが理解できなかつたし、シグレはユチカの話の意味が分からなかつたのである。

時雨はこの世界で起こった不思議なことを、魔法か科学技術の発
展かと最初は疑っていた。けれども生活水準を見て、魔法のほう
ずっと理にかなっていると 魔法が理にかなっているかは別とし
て とりあえず時雨にとっては魔法があると理解した方がずっと
分かりやすかったので、そう思い込んでいたのである。

けれどもユチ力はそうでないと言った。水神様の力なのだと
言ったのである。

ユチ力は、この世界では水神様は存在する神様、わかりやすく
言えば実在する神様だと言うのであった。つまりは世界があり人間が
居て神様があるのではなく、神様がいて世界と人間ができあがった
ということ。

そしてこの世界はその神様を中心に回っているのだ、と。

魔法は使う人間が行う行動であるのに対し、水神様の力を使うの
には水神様が行動しなければならぬ。

そこで神官は神を崇拜し尊敬し、そして願いを届ける役割を果た
しているのだ。その役割のために神官が存在している。時雨の世界
での神官の意味合いも含まれてはいるものの、そこまでの大きさで
はない。そして願いが聞き遂げられると、例えば異世界への扉が開
いたりする。

そして水神様からの言葉を持って帰ってくるのがまじない師の仕
事である。水神様選ばれた一族が、世界が出来上がったその時か
らまじない師として働き続けている。

だから彼らの預言は、つまり予言ではない。

神様から文字通り、本当に預かった言葉を人々に告げているので
ある。

ここまでを理解するのに、時雨にはかなりの時間が必要だった。何度も聞き返し、またはユチカに自分の世界のことを何度も聞かれ、ようやく頭ではわかった、というようなところまでくることができた。

まず時雨にとっては神様が実在するのだということから眉唾ものだとも思え、理解しがたかった。時雨にとっては、というよりも時雨の暮らしていた世界の人々には真面目に考えたこともないようなことがこの世界では当たり前のことであり、またその逆も然りなのだ。

「僕は世界には必ず水の神様がいるものだと思ってたよ。文化や文字が違うのかと想像してみたことはあったけれど、水神様がいないなんて」

ユチカがしみじみと言った。時雨もそれに返す。

「私も、びっくりだよ。実在する神様なんて手の届きそうな気がするし」

「でもこれで、僕がまじない師の言葉を信じて君と一緒に行く意味はわかったよね？」

そういえばその話だった、と時雨は頭をパンクさせそうな情報を一度隅に追いやった。

他の話が長々と続いても、結局ユチカの問いへの返事に窮することは変わっていないのである。

時雨はしばし黙って考えを巡らせた。

ユチカと一緒に来たらラミノはどうなるのか、なんて台詞を言う

ことは簡単にできたが、時雨はユチカが来てくれた方がずっと心強いことも分かっていた。時雨はラミノのことが好きだったし感謝もしていたが、他人であるラミノと自分を天平にかけてどちらが重たいかなんて考えたくもないことだ。

「どうすれば、いい？」

結局時雨は当たり障りのない言葉を返した。

「ラミノ姉さんには君が異世界人だということは知られてない。だからとりあえず、君はまた旅を続けるからということで、この家を出てくれ」

「でもユチカは？」

「普通に旅にでたいと言えば止められてしまうだろうから、家出まがいのことをする。僕ぐらいの年齢の人間が王都に行くために家出をするのはよくあることなんだ。君について行くって置き手紙を残せば、ラアンさんだってそんなには心配しないはずだ」

ユチカが家出をする少年のような性格には全く見えないと時雨は思ったが、彼の決心は固いようだった。

きつとラミノは心配するだろう。時雨は思った。会って数日の時雨のことでも心から心配してくれた彼女が、何年も一緒に生きてきた夫の忘れ形見とも言えるような大事な弟がいなくなつて心配しないはずがない。

私も妹が家出したなんてことになれば慌てて探し回るに違いない、時雨はそんなことを考えてはつとした。

そう言えば、喜雨は今どうしているのだろうか。

あつちではきつと時雨は行方不明とされているだろう。父も母も妹も心配しているに違いない。時雨ががいなくなった理由を探しては自分たちを責めているのかもしれない。もしかしたら自分たちが忙しかったせいだと泣いているかもしれない。そんなことはあるはずがない、と時雨は心の中で家族に訴えかけていた。時雨は家族が大好きだったし、家出なんて考えたこともなかったのだ。

泣いているかもしれない妹の顔を思い出して、そして時雨の耳には泣いている妹の声がリアルに再現された。夢に出てくるその声。

そういえば、とそこで時雨はまた気付く。時雨はあの悲しい夢をこちらにきてから一度も見えていなかった。最終的に私を彼らから救ったあの痛々しい悲鳴を最後に、夢は途切れていた。

でもこれは、これだけはいいことか。

時雨はそんなことを思いながら、気持ちを切り替えて思考をユチカの話に戻した。うだうだと悩んでいても元の世界に戻るわけではない。

その時時雨の口から大きなあくびが飛び出た。緊張が少しほぐれたからだろう、時雨は強烈な眠気に襲われていた。時雨は壁に掛けている時計を見上げる。文字は読めないが、時計の形は時雨の世界と同じらしく、針だけで見るのならばもう丑三つ時もとつくに過ぎ、朝のほうが近くなっていた。

そこで話は打ち切りになり、ベッドに入った時雨は瞬く間に眠りについていた。そして朝を迎え、時雨はラミノに出発の話の切り出

したのである。

ラミノは思い切り残念がった後、時雨のために食べきれなさそうなほどの弁当を拵えてくれた。残念だわ、残念だわ寂しいわ、と何度も繰り返した後、仕事があるからと名残惜しそうにしながら時雨に別れを告げて家を出て行った。

「行こうか」

そう切り出したのはユチカだった。机の上には彼が義姉に対して書いた手紙が乗っかっている。特に隠しているようでは無くとも、時雨はその手紙を読まなかった。

ユチカが傍に置いてあったリュックサックのようなものをしつかりと背負ったのを見て、時雨もゆっくりと立ち上がる。

時雨は今、ラミノから貰った服に身を包んでいた。ゆったりとしたワンピースのような服だ。下にズボンを履いてはいるが、これから遠出するような、ましてや旅をするような格好だとはとても思え

なかった。これが女性の標準装備だと言うのだから驚きである。時雨の世界から着てきた服はラミノに預かってもらうことに決めていた。この世界に居る限り着ることのできない服を持ち歩くほど非効率なことはない。

時雨は鞆を肩にかけた。シンプルなそれはこの世界でも通用する代物だったことが時雨にとっては救いでもあった。自分の世界のもの何一つ持てなくなってしまうと言うのはやはり心寂しい。時雨はその鞆の中に、ラミノから貰った弁当を丁寧に入れた。

家の外は雨が少しだけ、そぼそぼと降り注いでいた。日本人としては傘を差したいくらいにの天気だが、この世界ではこれくらいでは傘と言うものが登場しないらしい。雨対策なのかつばの広い帽子をかぶった人がちらほらと居るくらいで、残りの人間は変わらずにそのまま歩いていった。

そんな人々をちらちらと見ながら、時雨は俯き加減で歩いていた。自分の顔を覚えている人間がいたらと思うと、やはり不安なものがある。

「ここだ」

ユチカが止まったのは町のはずれに差しかかるうかと言うところだった。一体何がここなのかと時雨は疑問に思ってユチカに顔を向けた。

「この町の町門は、通る際に名前を書かなければならないんだ。僕は良いとして、君はここで名前を残したりしない方がいい。入門帳に名前もないだろうしね。だから、ここで一度別れて少し行ったと

「ここで落ち合おう」

「雨で湿った髪の毛が頬に張り付きはじめていた。

時雨は言われた言葉は理解していたしユチカの言うことに従うしかなかったが、それでもユチカと離れると言っただけで不安感を拭えなかった。追われているということへの心労は、意外と重たい。

「この細い路地をまっすぐに歩いて行くと、つきあたりで左右に分かれる。そこを左に曲がって暫くすると左側に緑の垣根がずっと続くのが分かると思う。その、五十二本目と五十三本目の木の下をくぐると、正面に小さな林がある。その林の表面の、一際背の高い木の足元を見れば、生い茂った木々の中にけもの道みたいなものが出てくるのが分かると思う。そこを通ってくれば、門の外に抜けられる。その道の出口で待っていて」

少し町の外に出たいときなんかには町の人が使う黙認された非公的な道だよ、とユチカが行ったが、時雨は頭の中にその道のルートを詰め込むことに精いっぱいだった。初めは直線、次は左、すると左側の垣根……。何本目の木で垣根の下をくぐるんだっただか。

二三次ユチカに繰り返してもらい、時雨はどうにかその道を覚えたと不安だらけの気持でユチカと別れた。

細く暗い裏路地に入り、まっすぐに歩き左に曲がる。一気に人気の少ない道に入った。それでもときどきすれ違う人はおり、そのたびに時雨は自分の靴を見ながら歩いた。

そのまま長らく歩いてもなかなか緑の垣根など現れず、さっそく道を間違えたかと青くなっただころでその垣根は見つかった。時雨

の身長の倍はありそうなその垣根は大きな葉っぱが沢山茂っているせいで、向こう側を見ることは難しかった。

一本、二本、三本、と時雨は目を凝らしながら歩いていく。枝や葉は混じり合って、幹の根元をしっかりと見ていなければ木の本数さえ数えることは難しかった。

五十二本目の木を数え終わると、なるほどその木と次の木の間だけ、少し感覚が広いようだった。草木でカモフラージュされてはいるが、目を凝らせばすぐにそこを人が通ったことくらいは分かるだろう。時雨は周りに誰も居ないのを確認して、両膝について前かがみになると、その垣根の下に頭を突っ込んだ。

垣根の下の距離はせいぜい四十センチほどで、時雨はすぐに顔をそこから出すことができた。立ち上がって膝に着いた泥を払いながら、これから行く道を頭の中で確認する。背の高い木の根元の道。そう思っただけ顔をあげて、時雨は驚いた。

「ラミノさん」

「シグレちゃん」

ラミノがユチカが持っていたようなりユツクを背負って、くるくるとした髪を風に任せながら立っていた。時雨の驚きもよそに笑顔で立っていた。まるで時雨が来ることを知っていたかのように、時雨の姿を見てもこれっぽっちも驚いた様子を見せなかった。

「ここを通ると思ってたわ。ユチカは、町門の方に行ったのね」

まるで分かっていたような穏やかな口ぶりに、時雨はラミノが全

てを知っていたのだと悟った。どうして、と呟く時雨に、ラミノは悲しそうにほほ笑んだ。しょぼしょぼと降る雨が、少しずつでも確実にラミノの肩や手足を濡らしていた。

「ユチカとずっと一緒に暮らしてるのよ？ 分からないわけないわ。あの子は夫が、あの子の兄が居なくなってから変わった。もっとやんちゃな子だったのよ、木登りが好きだった」

時雨は木に登ってはしゃいでいるユチカをどうにか想像しようとしたが、あまりにも不似合いに思えてしまつてできなかった。ラミノが背負っていたリュックを下ろして地面に置いた。小さなため息が時雨の耳に聞こえてきていた。

「あれで隠し通せている気なんだもの、まだ子どもね」

ラミノがおかしそうに微笑んだ。そしてそれから、まるで遠くを見ているような眼差しで呟く。

「でも、意思だけは大人よりも強い子」

暫く黙った後、ラミノは吹っ切れたかのように満面の笑みになった。そして時雨に、手に持っていたリュックを差し出す。リュックも上部が少しだけ濡れ、変色しているのが見てとれた。

「これ、急いで買ってきたの。旅をするなら、服や下着の替えも必要でしょう？」

「あ………」

いろいろなごたごたのせいで、時雨はそんなことにすっかり気が回っていなかった。ユチカがそうした大きな荷物を担いでいたにも

関わらず、時雨はさほど大きくない肩掛けカバン一つであったのだ。それと同時に、ラミノは時雨が旅人などではないこともとつくに見抜いていたのだろうと思った。言われてみれば、小さな肩掛けカバンに着替えもお金も無しで旅をする人間など普通はいない。

「いつかこういつ日がくるんだと思ってた。夫が亡くなったという知らせが来たその日から。ユチカはね、大人ぶっては居るけれど、結局まだ子どもなのよ。どこかおうちよこちよいで抜けてるから、こついうあなたのことにもまで気が回らない」

時雨がリュックを受け取ると、ラミノは満足そうに笑った。けれどその笑顔は時雨にとって、けして明るいと思えるものではなかった。ラミノは自分の髪の毛を耳に掛けながら、時雨の肩をゆっくりと撫でた。雨にぬれたラミノの、ひんやりとした手の冷たさが時雨に伝わってくる。

「あの子のこと、よろしくね」

「あの、今から私と行けば、ユチカに……」

「いいの」

会えます、という時雨の言葉は、発する前に遮られた。ゆるゆると首を横に振り否定の意思を表すラミノに、時雨は黙る。

「あの子に会ったら、私はきつと止めたくなくなっちゃうから。それはあの子が望んでいないことだね。私の大好きな夫のためにユチカは必死で頑張っているのに、私がそんなことを言うのはお門違いよ。だから、」

せめてあの子が幸せになれるように。

ラミノの目じりにはぼんやりと水の塊があるのが時雨からでも窺えた。それでもラミノは笑顔だ。決してそれ以外の表情を時雨に見せようとはしなかった。

なんてすごい人なんだろう。時雨は貰ったリュックサックの紐をぎゅ、と強く握る。

なんて美しい人なんだろう。

「ありがとうございます」

時雨はそう言うことしかできなかった。適当な言葉が一つも出でこず、妥協した上でこの言葉だった。ラミノは時雨を引き寄せて、抱擁した。濡れて冷たい頬があたる。女の子が無理しちゃだめよ、という呟きに、時雨の目頭も、少しだけ熱くなった。

「お弁当、ユチカの好みをいっぱい入れておいたから、二人で食べてね」

最後にそう言って、ラミノは時雨の背中にリュックを背負わせた。さあ、と背中を押されて、時雨は何度も振り返りながらもゆつくりと歩き出す。ラミノはずっと笑顔で、時雨が振りかえるたびに手を振った。そして時雨が一番高い木を見つけ、そのぬかるんだ道に足を踏み入れてから振り返った時。

遠く離れて小さくなったラミノが泣き崩れている様子が見えて、時雨は振り返るのを止め、草の生い茂った道を速足で歩きはじめた。

9 綿雲にて洗う

三千里歩き続けたとは言わないが、時雨にとっては初めてこんなにも歩き、やっと町に着いた時時雨は安堵した。今にも崩れ落ちそうなぼろぼろの宿に入り、汚いベッドを見ても時雨は全く気にせずそこに飛び込んだ。

町に辿りつくまでの日々、時雨が何よりも辛かったのは野宿であった。簡易テントのような虫が易々と入ってこれるようなものの中の野宿は、時雨にとっては辛いものでしかなかった。

外でのトイレにも抵抗感しかなかったが、野宿に比べればと思うとそれにはどうにか慣れることができていた。

野宿の初め一日はほとんど眠れず、雨が上がったばかりの地面の上を這いまわる虫たちを払い落とすことに必死になり、疲れているにもかかわらず休息という言葉を実行できなかった。

二日目は前日からため込んだあまりにも疲労で、いつの間にかぐっすりと眠りこんでいたが虫が顔を上つてくる気持ち悪い感触に大声をあげて目覚め、またそれから一睡もできなかった。

そんな日々を過ごしかなりぐったりとしながら旅を続けてきた時雨は、室内であり布団と言うもので眠れるのならそれがどんなものであっても嬉しかったのである。

その旅の行程の間、ユチ力はただひたすらに歩き続けていた。待ち合わせ場所で待っていた時雨の元にユチ力がやってきた時、ユチ力は時雨の持つていたりユツクを見て察したのか、寂しげな顔で顔を伏せ、時雨に何か言うこともなかった。

ユチ力のその様子に、時雨も何も言えなかった。

ただ、ユチ力がお弁当を噛みしめるように食べている様子を見るだけで、時雨にはユチ力の心情を察知することぐらいはできた。

出発こそ雨であったが、その後に雨は上がり、綺麗な青空が続く天気だった。人通りのない山道を歩くばかりで虫の存在や暗闇の怖さに時雨は不安と恐怖を募らせていたが、その気持ちをユチ力に言うことは時雨には憚られた。

追われているのは時雨であり、時雨のためにこんな歩きづらい道を使っているのだ。だから何日間も土の道ばかりを歩いたあと、町の舗装された道路を見て時雨は内心大喜びだった。

この町に来るまでの長い道のりの中で、この世界についての知識をユチ力から多く学ぶことができていた。

まず、時雨がいるこの国はバルート王国と言う名前である。海と山に囲まれた資源豊富な国であるが、他国から何よりも注目されるのは水神様の第一神殿が存在することだ。時雨にとって驚くべきことにこの世界に全世界に知られているような有名な宗教は一つ、エニアラ教しかなく、そしてその唯一神である水神様を奉る第一神殿があることはバルート王国、ひいては国民の誇りであると言う。しかしその宗教が災いして、王国とは名ばかりのものになってしまっている。

かつては、険しいハニーク山を越えてこの地に足を踏み入れ、

大地を切り開き蛮族を追い出した王の力は国の宗教に勝るものであり、信仰とは異なるベクトル上のものとして王権や王威は毅然として存在していた。

しかしいつの間にか言うべきか陰でじわじわと言うべきか、宗教の力、つまりは神官たちの力が増大し始め、一国の王でさえも上位神官の言い成りになってしまっているのが現状である。

この話を語った時、ユチカは怖いのはその事実を知りながら恐怖を抱かない国民だと言った。彼らの力関係が変わっても今のところ国民の生活に大きな変化は見られず、だから国民にとってこれらの事実は雲の上の出来事と何ら変わらないこととなってしまうていることが問題だとそう話したのである。

僕も兄のことがあるまでは何も思っていなかったけれど、と一旦台詞を切った後、それでも自信を持った瞳でユチカは憎々しげに、だから神官たちが怪しいことをしていても気づかれないのだと語った。

第一神殿だけでなく、第三、第四、第七、第十神殿と全部で十ある神殿のうち五個はバルート王国の国内に存在している。そのことにより領土を略奪しようとする国もあるようであったが、神殿を多く所有していることはイコールで水神様の力を多く借りられることに繋がるために、勝てない戦いを挑む国はほとんどなく、逆に恩恵にあずかるうとする多くの国々とバルート王国は同盟を結んでいた。

これは水の神の持つ力がどれほど広大かと言うことと、人々がそれを敬い畏れて、または恐れているかがよくわかる事実だろう。

ここまで宗教の力の大きさを語ったが、この世界の人々が皆偏執的なエニアラ教信者であると言うわけではない。其処ら辺は時雨の世界と何ら変わらず、深く信じて日々の生活にそれを生かそうと

するものも居れば、幼いころから当たり前であるその宗教を日常の一部として捉えている人もおり、また時には水神様という存在は化け物であると言うように神様を否定し、少数派ではあるが時雨の世界のように概念的なものを神様だと考える人間もいる。

それらのことを道すがらに多く広く、時雨はユチカに教えて貰った。

ベッドの上でごろんと回転し仰向けになった時雨は、息を大きく吐きだした。このごろ晴天が続いてきたが、今夜は荒れ模様となるらしい。あまり手持ちのないお金を使ってまでこの宿をとった理由だった。時雨はこの世界のお金など一銭たりとも持っていないからもちろんユチカのお金であるが、時雨は申し訳なさよりもありがたさで胸がいつぱいだった。一日でも虫の恐怖におびえないで寝られることが、今の時雨にとって何よりの幸福だった。

嬉しさを一通り噛みしめた後、時雨は一度大きく伸びをしてからはずみをつけて起き上がった。連日歩き続けたために体中が筋肉痛でだるいのだが、今寝てしまつて困るのは時雨だった。

時雨はリュックの中から服や下着類を取り出し、腕に抱えて立ち上がった。数枚しかない衣類の洗濯を夜のうちに済ませておかなければ、すでに汚い服をまた何日間も着続ける羽目になる。

宿の女将に教えられたとおりに玄関を出て、庭を歩いて裏口の方へ行く。まだ明るいのが、受付にある時計は午後六時を差していた。日照時間は日本よりもかなり長い。

裏口側にある庭には水が流れっぱなしになっている小さなスペースがあり、そこがどうやら選択をする場所らしかった。可愛らしい庭だ。どちらかというとな民家の庭に近く、子どもが遊べそうなブランコや砂場が作られている。

洗い場には先客がいた。女性が、背を向けて洗濯をしている。時雨は他のお客さんだろうと見当をつけた。

「隣失礼します」

時雨はそう言うと空いているスペースに入って洗濯を始めることにした。予想はしていたが、戦前の日本のような洗濯方法にげんわりしながら時雨は洗濯物を水に浸す。そういえば洗剤がない、と時雨は思ったが、その問題はまあしょうがないか、とすぐに自分を納得させることができた。水で洗えるだけマシである。

そのままごしごしと、流れる水の中で時雨は服を擦った。泥で黒ずんだ場所が綺麗になっていく感触は気持ちがいい。が、疲れている時雨は腕に力を入れることさえも億劫で、一枚目の服さえもなかなか終わりそうになかった。疲労のせいか眠気も強く、やる気も湧きにくい。

「アンタ、洗剤無いの？」

凜とした声が響いたのは唐突だった。

手を水の中に浸しながらうとうととしていた時雨はその声ではつとしてバツと顔をあげた。声を掛けてきたのは先ほどまで隣で選択をしていた女性。二十代半ばだろうか、ツリ目がキリリとして、時雨はカッコいい印象を抱いた。ショートに切りそろえた髪は余計に女性を強く見せていた。

勢いよく女性を見た時雨を見て女性はカラカラとさっぱりした笑い声をあげた。

「あつははは！ アンタ今寝てたわね。すつご、間抜けな顔！あはは！」

一通り笑い終わると、恥ずかしくなって顔を赤くした時雨を見て女性は目の端に溜まった笑い涙を指先で拭いた。

「ごめんごめん。間抜けだったけど可愛い顔だったわよ。あたしはシアーナント。皆はシアーって呼ぶわ。よろしくね」

「あ、時雨です。こちらこそ……」

反射的に時雨がぺこりと頭を下げて顔を起こすと、シアーと名乗った女性は今度はぼかんとまるで驚いた顔をしていた。疑問に思っ
て時雨が首を傾げる。女性は顔を元に戻すと、わああ。と呟いた。

「おつどろいたあ。アンタお嬢ちゃんね。挨拶の時に頭を下げるなんてひっさしぶりに見たわ。……てことは、やっぱり貴方たちは駆け落ち？」

「は……？」

ぼんぼんと話す女性の会話が早くて時雨はその言葉を捉えるだけでやっとだった。

「あ、アタシ今旦那とこの宿泊まっただけだし、もちろんだからここで洗濯してんだけど、まあそれはどうでもいつか、んで、アンタと連れの赤茶髪の男の子？ 二人でここに入ってくんの旦那と見てたわけよ。どう見たってまだ十代の二人組がこんなぼろっつい

訂正、こんな古風な宿屋に泊るなんて興味湧くわよ、普通。だから旦那といる予想してたのよね、アンタたちがなんでここに泊まってんのか。んで、今アンタがお嬢っぽく見えたから、これは身分違いの二人が駆け落ちでもしたのかな、とね。赤茶色のシグレの

シグレって呼んでいい？連れまだシグレよりも若そうだけど、愛に年なんてってやつよねえ」

「あの、違います。駆け落ちじゃないです」

「あつれ！ うっそ、マジで？ アタシの勘は当たんなかったかあ。じゃあ姉弟で生き別れになった親を探してるとか？ これは旦那の予想」

「それも違います」

笑ったりはしゃいだりうっとりしたり、表情をくるくると変えながらシアーはよく喋る女だった。けれどもその変化する表情の人懐っこさか、話し方からか、時雨は彼女に不快な気持ちを抱くこともなくむしろ好意的な感情が湧いた。

「じゃあ何で？ どうして二人でこんな宿泊まってるの？」

「あ、それは……………」

なんて言えば良いのだろうか？時雨は返す言葉を見つけられなかった。こんなことなら、二人の関係についての嘘をユチカと話しておけばよかったのだと時雨は落ち込んだ。

黙ってしまった時雨を見て、シアーはあっけらかんとしたものだった。

「言いたくない？ 何か込み入った事情があるワケだ。じゃあ言わない言わない。アタシみたいな口の軽い女に話すとね、噂は一瞬で天まで駆け抜けるわよお」

気を使ってくれているのだと分かって、時雨は曖昧に返事をする。ことしかできなかった。そのときシアーが何かひらめいたかのよう。手をパチン、と胸のあたりで叩いた。

「そうそう、さっきアタシアンタに、洗剤無いのって尋ねたんだっ
た。無いの？」

「はい。もともと、荷物は最低限なんです」

「そんなこと言ったってねえ、年頃のオンナは着飾ってなんぼ、清
潔感があってなんぼ！ アタシの洗剤使いなさいよ」

時雨が遠慮する言葉を言う暇もなく、シアーは時雨の手に洗剤を
ひとつ握らせた。洗剤と言うよりは固形石鹼に見える。それどころ
かシアーは、時雨の持ってきた服を掴んでどこからかもう一個洗剤
を出し、水に手を突っ込んでわしゃわしゃと洗いはじめた。

「え、ちょ、大丈夫です！」

慌てて止めに入った時雨を、シアーは片手で軽くあしらった。自
分のものはもうとくにやり終えたどころか、どうやら物干しざお
にまで干し終わっている。時雨はシアーが自分の洗濯をしている間
ずっと、うつらうつらと意識の狭間にいたのだろう。

「あのね、アタシ今暇なの。ていうかアンタの洗濯下手すぎて見て
らんない。途中で寝ちゃうし。これだからお嬢サマは駄目なのよ。
自分で洗うってことを覚えなさいな。ほらほらアタシの手元見て、
真似しながら洗う！」

そう言えば特別にお嬢様なわけではないと否定することも時雨は
忘れていた。けれども時雨の世界ではボタン一つで洗濯ができたわ
けなので、洗濯をしたことがないと言うのもある意味本当なのかも
知れなかった。

命令口調のシアーに言われるままに、時雨は服をひつつかんで洗
剤を使った。シアーと話したおかげか、眠気はどこかへ飛んでしま

っていた。疲労はいまだに時雨の身体を重くしていたが、時雨はそれでも先ほどの三倍ほどのペースで洗濯をすることができた。もともと量も少なく、しかもシアーが手伝っているために、服たちはすぐに物干し竿にぶら下がった。

「ありがとうございます」

時雨のお礼に、シアーはいいのいいの、とケラケラ笑った。

「アンタたちは何泊してくの？」

「一泊です」

「アタシたちと一緒にね。まあ観光に来たワケじゃないし、こんなボロ口、じゃなくて古風な宿に何泊かしたってイイコトなんて無いかしら」

「あ、そう言えばシアーさんはどこかに行く途中ですか？」

そのシアーの人柄のせいもあるだろう、時雨はもう彼女に親しみを感じていた。尋ねると、シアーはそうなの、と手をひらひらと動かした。

「旦那がさ、昇進したのよ、昇進。だから引越すの。荷物は馬車に乗せて先に送ってもらったんだけど、交通費でないのよ、あり得ないくらいケチ。で、しょうがないから旦那と二人で移動中ってワケ」

「昇進ですか？すごいですね」

「でっしょ？聞きたい？いまからの旦那の勤め先」

どちらかと言うと時雨が聞きたいのではなくシアーが言いたそうである。時雨は素直に聞きたいです、と言った。すると今までで一番満面の笑みをシアーは返した。よっぽどすごいところに昇進した

のだろうか。時雨は考えを巡らせる。しかし会社の名前など時雨は全く分からないから、驚いたふりをするしかないかもしれない、とも考えた。

「聞いて驚け見て笑え！私の旦那はね、地方の名もない神殿神官から、第四神殿への大抜擢をはたしたのよ！」

テレビであればじゃじゃーん、と効果音がつきそうな台詞と格好で、シアーが言った。時雨はそれにかぱんと口を開けて驚いた。演技でも何でもない。第四神殿とは、エニアラ教第四神殿である。

シアーは時雨のその表情に満足そうに頷いていたが、時雨が驚いたのはシアーの考えとは全く異なった意味からであった。

こんなにも早く、エニチカ教の関係者に会えるとは……。

ラッキーなのかそうでないのか、思ってもみなかった事態に時雨はただびっくりすることしかできなかった。

10 淡雲すりぬけもくもくと

サンテグリユを目指して、時雨とユチカは旅をしている。

サンテグリユとは、学術の発達した大きな都市だ。国一番の大学のある大きな町であり、王都と第一神殿のちょうど中間あたりにあるために情報が一番良く入ってくる町。

ユチカは時雨にそう説明した。

ユチカ達の住んでいたラステユの町を出発したが、時雨はそこから彼女自身がどこに行くのか、何を目指しているのか全く知らない状態だった。なのでユチカが時雨にもたらす情報で、時雨の世界は回る。そのユチカは時雨に、サンテグリユに行くと言った。

「とりあえず、僕らの手元にある情報はすごく少ないんだ。僕が調べられたのは全部表面的な情報だけで、結局本を読めばわかることばかり。だから、サンテグリユで情報を得るべきだと思うんだ」

「情報って、どんな？」

「とりあえず、神殿の噂とかを調べよう。僕らが住んでたような、小さな町には流れてこない噂。そう言うものから風漬しに当たっていく。それから、サンテグリユを少し西に向かえば大きな神殿がある。ここに信者として通って神官と知り合うのも手だと思う。あそこの神殿の規模なら、多分地位の高い人間もいるはずだよ」

「それって、長くかかるよね？ 私も手伝えばいいの？」

もちろんだとユチ力は頷いた。時雨の台詞にこめられた不安もきちんと読み取ったらしかった。

「時雨が追われる立場だって言うのはしつかり理解してる。でも、下手に隠れているよりは一住民としてこの世界に馴染んだ方がずっと居場所がばれないと思うんだ」

「……そうかな」

ならいいけど、と時雨は呟いた。追いかけられると言う恐怖は想像以上のものだ。不安感は決して拭えるものではない。そんな時雨を励ますかのようユチ力は大きく頷いた。

「この世界に慣れさえすれば、シグレはどこにでもいるありふれた人間だろう？ 僕らと何も変わらない。幸いにも、時雨の顔を見たのはあの二人組だけみたいだし、あの二人に見つかる以外、よっぽどのがないと大丈夫だと思う」

ありふれた人間。もとの世界で言われて良い顔をする人は少ないだろう。けれどその言葉は今の時雨にとっては嬉しいものだった。時雨がこの世界の異物ではないと言ってくれるような言葉。時雨はその言葉大きく救われた。世界は広いのだから、その中の二人と遭遇する確率は低い。

そうだよ、と時雨も力強く言葉を返した。もう一度繰り返す。

「そうだよ。それで、私は何をすればいいの？」

「とりあえず、普通に暮らせばいい」

「へ？」

少しぐらいなら危ないことだって、という心を持って尋ねた時雨は帰ってきた返答に少し拍子抜けした。そんな時雨の間抜けな声に

ユチカは少し笑った。

「とりあえず、だよ。危ないところから情報を得ることもあるだろうけど、最初は町に馴染んで、近隣の人から信用されて、そこからだ」

なるほど人から重要な話を聞きだすときには、信頼関係が一番大事なのである。長期戦になると思うと、ユチカはこのときに言った。

「何も下準備が無い状態で、一から始めるから、どれだけかかるかわからない。でも多分、まじない師の予言があったし、シグレがこちらに来たことと、僕がやろうとしてることは繋がってるはずなんだ」

もちろん分かってる、と時雨はそれに返事をした。どの道ユチカがいなかったら時雨は途方に暮れて当てもなくさ迷い、良くてホームレス悪くて死である。時雨がユチカに従わないなんてことを、彼女自身はまったく考えていなかった。

詳しい話は町に着いたらにしようというユチカの言葉で、二人のこの会話は終わった。

その会話を思いおこしながら、時雨は横に座るユチカをちらりと見た。シアアの旦那、ザイルとユチカが話に花を咲かせている。ザイルは図体こそでかくがちりとしているものの、口調と目元は驚くほどに優しい男性だった。

シアーと出会ったことと、その夫が神官だと言う話をするユチカは偶然に驚きながらも喜んだようだった。しかも第四神殿、サン

テグリユの西にある神殿にこれから勤める人間の発見に、ユチカは嬉々とした顔をした。

夕食のときに話しかけてみよう、と時雨とユチカは話していたが、夕食はシアーの方から誘ってくれた。そこでユチカは、まるで熱心なエニアラ教信者のように、実際にそのふりをしてザイルに話を聞いていた。

必然的に、時雨の話相手はシアーとなる。

「それにしても、行き先がサンテグリユなら第四神殿に行くアタシたちと一緒になんだから、さっき言ってくれても良かったじゃない」
「あ、すいません。それよりもザイルさんが神殿に勤めることにびつくりしてしまっ……」

「あはは、アンタ本当に驚いてたもんねえ。さすがにあんなに驚かれるなんて思わなかったわ。そんなに珍しかった？」

「いえ、ユチカが神殿にすごく興味持っていて、サンテグリユに行ったら神官と話したいなって言っていたから、こんなに早く会えて驚いたんです」

第四神殿に勤めると聞いて、時雨は文字どおり口を開いて驚いてしまったのだった。もちろんそんなことを言えるはずもなく、曖昧な笑みで誤魔化しながら時雨は嘘をついた。さらりと上手な嘘がつけて、時雨はほっとする。

けれどもその横で、シアーナントはもやもやとした感情を胸に浮かべていた。

どーうも、気持ち悪いわ。

シアーナントは夕食を食べながらそう思っていた。横にはシアーナントの旦那であるザイルがどっかりと座り、正面で時雨が、斜め前ではユチカが食事をとっていた。ザイルとユチカの間で話が盛り上がっているらしい。時雨はと言えば、久しぶりの温かいご飯を噛みしめながら一人で黙々と食事を続けていた。

一緒に食事をどうかと声を掛けたのはシアーだ。気さくな性格の彼女は、先ほど話をした時雨が連れの男の子を引き連れて食堂にやってきたときなんの気なしに声を掛けた。旅人にはよくあることだ。一期一会の出会いを大切にすべきだと言うことは、シアーも良く知っている。

「君は本当に、よく知っているねえ」

「いえ、好きなんです、こういうことを覚えるのが。他のものは全然駄目なんですけど」

そんな会話が耳に入ってシアーがふと横を見ると、ザイルは本当に、お世辞でなくユチカに感心しているようだった。

体格だけがっしりしているザイルは、驚くほどに温和な人間だ。全体的な骨格がしっかりしており、その見た目のせいで勘違いされることが多く、大抵の人間はザイルの話し方や、柔らかな目元に驚く。ザイル自身はそう意図しているわけでもないのに、生まれ持った形だけが間違えてしまったような人間だった。

そのザイルとユチカは、どうやらザイルの職業、つまりは神官の話で盛り上がっているらしかった。

シアーが視線をひよいと時雨に移すと、彼女は二人の話を聞いてはいないらしく、スプーンを握りしめてゆつくりと口に運んでいるようだった。左手は机の上で皿に添えられ、スプーンの持ち方から上品さがにじみ出ているようにシアーには感じられた。やっぱりお嬢様ねえとシアーは感心する。

シアーが気持ち悪いと思ったのは、この時雨だった。もちろん見た目が、と言う意味ではない。シアーナントがうまく理解できず、何か違和感があるその自分自身の感情を気持ち悪いという言葉で表現したのだ。

なんだろう、とシアーは考える。何かもやもやしていたのだ。けれどもその理由は、シアー自身にそれ以上のことは分からないだろう。これを理解するには時雨を知らなくてはならない。

ここから少し、時雨の話をしよう。

時雨という人間は、ごく普通の人間である。しかし、変わっている。ここで断っておきたいのは、普通というカテゴリーの中には曖昧さが存在しているということだ。

一般的、客観的に見れば時雨は普通であるし、時雨の妹の喜雨もユチカモラアンも皆、普通の人間という括りの中にカテゴリーライズできるものである。けれども一度深くまで近づくとそれは変わる。

他人から知人になり、そして友人になればその人の個性、つまりは変わったところが見えてくる。この時初めて、自分から見た他の人間が普通では無いものになるのである。

つまりは近づかなければ、その人を知らなければ、その人間が過

去に何をやった人間であれどんな性格であれ普通の人間であり、ただの“人間”というのつべらぼうにすぎない。

そう言う意味で時雨は普通であり、普通ではない。同じように世界すべての人間は普通であり、普通ではない。

さて、ここで難しいのが“知人”という関係になってくる。他人であれば普通であり、友人となれば個性的に見えてくる。だったら知人はどうなのだろう。名を知り顔を知り、話したこともある。けれども友人と呼べるほど仲良くはない。

人はこの関係のときに、その相手との距離を決めるのだ。この人は自分とそりが合うかどうか、自分の身の丈に合っているか、そう言ったことをこの場所で推し量る。そこで悪い印象を抱かれれば他人に逆戻りし、良い印象を持たれれば友人に昇格する。

時雨はその、中間にいたることが上手な人間だった。

良くも悪くもない、曖昧なスペースに時雨はいる。人に影響を与えないという意味では無害な立場に時雨は今まで立ってきていた。否、その立場以外での立ち方を知らないと言う方が正しい。それは彼女の生い立ちに関係があるのかもしれない。

時雨は忙しい両親の元に生まれ、乳飲み子であるうちは一日の半分以上を祖母と暮らしてきた。

時雨の祖母は、彼女のできる範囲では十分に時雨に愛情を注いだ。けれども一つ下の妹がいたことから、時雨が祖母に構われる時間は妹よりも少なかったと言ってもいい。

時雨の育ての祖母は、彼女が小学校三年生に上がるとともに亡くなったが、時雨が祖母を思い出すときはいつも妹がついてくる。

祖母が妹に、妹が祖母に向かって微笑みかけているのを、時雨が見つめている思い出。彼女は物心つく前からそうして育ち、そして物心がついてからはまるで息をするのと同じようにその場所に立っていた。

時雨にとってそれが当たり前のことであつたから、祖母とはそういうものだとして理解していたから、時雨は祖母を憎むことも妹を恨むこともしなかった。自分とはそういうものだとその頃は思っていたし、それがどこか違うのだと気付いた時はもうそんなことで恨むほど子どもではなくなっていた。

そこだけ言えば、時雨は驚くほど聡明な幼子であつたとも言えるだろう。自分の立ち位置を理解することなど、大人でも難しい。勉強や運動は人並みの時雨の、変わったところと言つのはそこにある。

小さな頃から第三者として自分の立場を見ることが当たり前であり、そうして生きて行くのが普通であつた時雨は、自分を客観的に見るのが驚くほど上手い。無意識のうちに他人から見られて一番無難な人間像を作り上げ、その通りに行動しているのが時雨だ。

だから時雨は人に嫌われることが極端に少ない人間だつた。けれども、その逆も然り。彼女は今までに親友と呼べる人間ができたこともなく、その作り方も分からない。あくまで無難な人間であろうとする時雨は、普通であるのにどこか淡泊で、薄い膜のようなものの中にいるようにも見える。

見目の印象で時雨に話しかけたり友人になろうと試みた人間は、皆その薄い膜を、なんだかよく分からないものとして受け取ってしまつたのだ。

つまり言いかえれば時雨は、自分をさらけ出すのが極端に下手なのである。

そんな時雨がこの旅の中で目下困っていることと言えば、やはり自分の立ち位置だった。いつの間にか真中に引きずりだされてしまったものだから、自分の勝手とは違う世界にいるものだから、どうやっていつも通りの落ち着いたスペースに行けばいいのか分からない。だから時雨は、ユチカの言う通りに行動していた。

この世界で今、時雨にとって一番信用できる人間はユチカだ。赤茶けた髪を持つ少年が、ユチカの命綱でありユチカの道標でもあった。実際時雨は今、ユチカに教えて貰わなければ自分がどこに立っているのかさえ分からなくなる。

だからユチカを信頼せざるを得ない。少年なのに年よりもずっと大人びたユチカを、時雨は掴みかねていた。接し方も難しい。だからユチカの言葉には素直に従うことが一番いいことなのだと、時雨の中では結論が出されていた。

いつのまにか、時雨は彼女自身がユチカに従順に付き従えばいいかのような、そんな錯覚さえ覚えていた。

この時雨の言葉にしがたい性格からくる歪な関係を、シアーナトは機敏に感じ取っていた。先ほど二人きりで話した時と比べて、時雨はずっと口数が減っていた。食事に集中したいのかもしれないが、それだけではないだろう。

シアーやザイルが話しかけると、時雨が時々不安そうな顔をしてユチカのほうを見るのをシアーは見逃さなかった。まるで話すことの許可を窺うような口調だ。実際は自分の話がこの世界にあっているかが不安な時雨がユチカに確認の視線を送っているのだが、それはシアーには分からないことだった。

そして時雨が言葉に詰まると必ずと言っていいほど、ユチカがその続きを引き継いだ。それが時雨とユチカの普通なのだと言われて

しまえばそれまでだが、シアーにはどうしても異物感のようなものが胸につつかえたのである。

時雨と話した時に、恋人関係でも兄弟関係でもないことをシアーは聞いていた。だとすると後考えられるのは友人関係か、仲間の意味合いを持つものか。ユチカと会うまで、シアーは実際そう考えていた。けれどもこれはまるで、とシアーは思う。シアーには、まるで主従関係に見えるのだ。

とは言ってももちろん詳しいことが分かるはずは無く、シアーは感じたことは感じたこととして自分のなかにしまった。

よくわかんないもんはよくわかんないわね。

半眼でシアーは思考するのを諦めた。もともと難しいことを考えるのは自分には似合わない。そうも思う。シアーはよくある商店の娘として生まれ、上と下に兄弟がいた。好きに生き、好きに恋愛をし、好きに結婚している。自分に幸せと言っ言葉はよく似合うと、シアーはこの年になってしばしば思っていた。そんなシアーは、自分自身が不幸でワケありの境遇の人間を理解するのを難しいことも知っている。興味本位であれこれと考えるのは止めにするべきだった。

それでも、彼女たちのいろいろな矛盾点や彼女のその性格の不思議さは、好奇心が強いシアーには気になるところでもあった。

「ねえ、どうせ行き先一緒なんだから、一緒に行かない？」

時雨はシアーのその台詞にきょとん、とした顔をして、それからや

はり助けを求めるかのように、ユチカの方を見たのだった。

雲のヘッドを探す

着いた街サンテグリユは、壮観だった。小さな山々に囲まれたその街は、時雨が山を下りてくる時にその大きさを見せつけていた。

シアー達と出会ってからすでに三週間は立っていたが、その行程で立ち寄った今まで来た街をすべて足したとしてもかなわない大きさであったし、一つ一つの建物も豪勢だった。

サンテグリユの町の中でもひと際目立っていたのは、せいぜい高くて四階ほどの建物のなかに、群を抜いて大きな塔だった。時雨の世界であればどこにでもあったであろう高さだが、高々四階までしかない建物の中に、ゆうに六十階はありそうなその塔は時雨を驚かせた。あつげにとられてその塔を眺めていると、横に立っていたシアーがこの町の中心であることを時雨に教えてくれた。

建物は全体的に、クリーム色が強い。この近くでとれる粘土石の色だろうと、ザイルがあたりを付けていた。

町の手前で、時雨たちとザイルたちは一端別れた。先に職場である神殿に向かうのだという。人数が増えただけで、やはり旅は格段に楽しくなった。シアーの軽口やザイルの優しい口調そんなものはとてもいいものだったが、けれどもシアーの物おじせずなんて

も聞いてくる性格に時雨は神経をすり減らしていた。

だからその別れに時雨は手をふりながら、内心ホツとしていた。いつ滅多なことを言ってしまうのかと、この二十何日もの間ずっとひやひやしていたのである。

街の中に入っても、サンテグリユのその凄さは際立っていた。今まで辿ってきた街とは規模が違うからだろう、これまでには無かった娯楽施設や、インテリア施設などのようなものがあるらしかった。時雨は物珍しそうにキョロキョロとしながら歩いた。この街でしばらくの間は過ごすのだと思うと、街のことを知っておきたくなかった。

ユチカも一度しか来たことがないらしく、今までよりも歩くスピードはゆっくりになっていた。彼も視線を泳がせている。時雨とはちがって何かを探しているようなその視線の動かし方に、時雨は不思議に思った。

「ユチカ、何見てるの？」

「案内所を探してるんだ」

「案内所？」

「いろんなね。観光案内も、宿泊案内も。こういう街は、いい宿を選ばないと」

その、いいが、値段や格式が高い、という意味ではないということは時雨にも分かった。こうして街の中を歩いてみると良くわかる。

今までの街とは違って、顔ぶれが多種多様になってきていたからだ。ここに来るまでの街は、比較的小さなものが多かった。すると

不思議と街それぞれに人々の特徴があるもので、時雨とユチカが街に入っただけで、自分でも浮いているという感覚を覚えた。けれどここはそれがなく、時雨は自分がすんなりと街に溶け込んでいると感じた。

色とりどりの異なる民族衣装。肌の色も目の色も、そして身分もそれぞれに異なっている。身にまとう着物や、すれ違う時に触れる服の触り心地で良くわかった。つまり、ここは身分の高い人から、言葉は悪いが浮浪者や流れ者まで、いるということなのだ。宿選びも慎重にならざるを得ないのだろう。

「あつた」

生憎字が読めない時雨には、どこに何があるのかは全く分からなかった。せいぜい店先に飾ってある商品で、そこが何なのかの検討を付けることしかできない。だから、ユチカが向かっていく店を見ても、一体それがどうして案内所なのかはまったくわからなかった。ずんずんと進んでいくユチカを、時雨は慌てて追いかけた。

「いらつしゃいませ」

声色が高めの、長い髪をした女性が受付のようなところに一人で座っていた。その後ろには、何個も机が置いてあり、そこで何人もの人が書類を片手に忙しそうにしている。役所のような印象を時雨は受けた。

「しばらくの間泊るところを探しているんですけど」

「どのような部屋を？」

「値段も気になるけど、安全を優先して。姉と二人だから」

そう言いながらユチカは時雨のほうをあごで軽く示して見せた。

長い髪の女性に目を向けられた時雨は、姉と紹介されたことへの驚きを取り繕って曖昧に笑い返す。

そう紹介するなら先に言っておいて欲しいものである。ユチカとは全く似ていないのだが、妹に見えるのだろうか。

そんな時雨の心配もよそに、営業スマイルを浮かべたお姉さんは何も気にせずにそうですね、と考え込んだ。

「それだけであれば結構な数が該当しますよ。もう少しなにか絞り込むことはありますか？」

「じゃあ、なるべくサンテグリユの塔に近いところから探してほしい。あ、あと僕は仕事もしたいんだ。雇ってくれるところも探すから、その仕事場に近いと尚いいかも」

仕事を探すのは時雨にとって初耳だった。時雨は顔をあげるが、時雨に背を向けているユチカがそれに気づくこともなく、しようがないか、と時雨はまた元の位置に視線をもどした。

少々お待ちくださいと席を立った受付のお姉さんは、分厚い本を持って奥から出てきた。ペラペラとページを捲るのを見ながら、時雨は視線を窓の外に移した。活気のある町である。クリーム色の壁、肌の色、着物を眺める。

全部違うなあ、と改めて時雨はしみじみと思った。

時雨の知っている世界は、ほとんどが日本だ。黒髪に黒目。ときどき亜麻色の人もないこともないけれど、それでも黒が大半。外

国人以外は、黒だったのだ。

けれどここは、まるで時雨が知っている外国。とりどりの色に、時代錯誤な服。

そんな外を眺めながら、時雨は目を瞑った。ここにきてからいつの間にかもう、二ヶ月近くがたとうとしていた。けれど時雨は、自分が何をしているのかがいまだによくわかっていなかった。

何をしたらいいのか、明確な目標さえもいまだかつてないのだ。なのに時雨は流されるままにこうして旅をしていた。

人に追われてこの世界にきた時雨にとって、今では追いかけられたその恐怖さえももう薄らいでいた。時がたつにつれて記憶が薄れ、また平穏な日々には安堵し始めていたのだ。

元の世界に帰る方法を探せばいいとも時雨は考えたりもするが、それは無理だろうと言う気持ちも時雨には芽生えはじめていた。シアーナントとザイルと一緒に旅をしている道すがら、エニアラ教の神官たちや異世界に行くと言う話をユチカがそれとなくは聞いていたが、どれも時雨やユチカに取って力になるものとは言い難かった。

「シグレ、ここでいい？」

その言葉を聞いて時雨は思考を止めて顔をあげた。ユチカが時雨に話しかける声だ。いつの間にかユチカは話を進めていたらしい。時雨は手元にある紙を覗き込んだ。そうしてから、読めないことに気づいて顔をユチカに向ける。しょうがないので頷くしかなかった。それを見て店員が書類を持ってきます、と席を立った。

時雨の曖昧な表情にユチカも時雨が字を読めないことに気がついたのだらう、そうだったねと呟いた。

「サンテグリユの塔から徒歩十分、市場の通りの裏にある宿屋だよ」
「うん。分かった。あのさ、働くって……」

「あ。言っただけじゃなかったっけ？そろそろ懐が厳しくなってきたから。働かないとそろそろやばいんだ。図書館での仕事があるみたいだから、そこで働くつもり」

「え、ユチカだけ？私も……」

「初めはそのつもりだったから、シグレの分も探していたんだけど。字が読めないと、やっぱり難しいよ」

「あ、そっか……」

字が読めないことは大変だと、時雨はこのとき改めて思った。

そのとき受付のお姉さんが戻ってきて、二人は一旦会話を止めた。ユチカが一言話しかけると、持っていた書類の中から一枚の紙が抜き取られ、隅に置かれた。多分あれが、シグレの働くために必要な書類だろう。

「こちらは紹介状になりますので、それぞれの主人にお見せください」

書類にハンコとサインが押され、差しだされた紙をユチカが受け取った。時雨は横からそれを覗き込むが、まったく読めそうになかった。分かったのはその書類の紙質がひどくごわごわしていることくらいだ。

働けないと言う事実は、時雨を少し困らせた。ただでさえ今までもずっとユチカのお金で生活していると言っのに、またこれからもそうなりそうである。

文字の勉強を試みようとして、ユチカに教えて貰ったこともあったが、一文字ずつが何か分かっててもその組み合わせ方や文法はちんぷんかんぷんだった。日本語とも英語とも異なるそれを覚えるのは難しすぎるのである。

私、何にも役にたっていないなあ……。

時雨は小さくため息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0077t/>

雨が泣くのを誰が知る

2011年10月9日02時59分発行